2020年度

第７回

アクサ ユネスコ協会
減災教育プログラム

助成校24校

実践活動報告書

（2021年３月）

～ 目 次 ～

（小学校・その他学校）
1. 川崎市立上作延小学校（神奈川）【P. 4】
2. 川崎市立新作小学校（神奈川）【P. 6】
3. 山梨学院小学校（山梨）【P. 10】
4. 犬山市立楽田小学校（愛知）【P. 14】
5. 安城市立明和小学校（愛知）【P. 16】
6. 大治町立大治南小学校（愛知）【P. 21】
7. 神戸大学附属小学校（兵庫）【P. 24】
8. 東広島市立三津小学校（広島）【P. 27】
9. 大牟田市立みなと小学校（福岡）【P. 30】
10. 大牟田市立白川小学校（福岡）【P. 32】
11. 箕面こどもの森学園（大阪）【P. 36】

（中学校）
12. 気仙沼市立鹿折中学校（宮城）【P. 39】
13. 只見町立只見中学校（福島）【P. 42】
14. 多摩市立多摩中学校（東京）【P. 44】
15. 茅ケ崎市立浜須賀中学校（神奈川）【P. 47】
16. 安曇野市立堀金中学校（長野）【P. 50】

（高等学校）
17. 宮城県多賀城高等学校（宮城）【P. 52】
18. 東京都立杉並総合高等学校（東京）【P. 54】
19. 和歌山県立和歌山商業高等学校（和歌山）【P. 56】

（中高一貫校）
20. 神戸大学附属中等教育学校（兵庫）【P. 60】

（特別支援学校）
21. 長野県上田養護学校（長野）【P. 64】
22. 愛知県立一宮東特別支援学校（愛知）【P. 68】
23. 愛媛県立今治特別支援学校（愛媛）【P. 71】
24. 沖縄県立八重山特別支援学校（沖縄）【P. 82】

学校名	1.川崎市立上作延小学校
担当教員名	竹垣　清夏　　町田　和隆

活動のテーマ	Shine　Smile　上作延　～わたしたにできる事・上作防災守り隊～
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	（　５学年　　１１２人）（複数可）
活動に携わった教員数	５　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	２５０　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　2020 年　7月　1日　　～　　西暦　2021 年　3月　２５日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

・学校は都心部の校外にあたり、新しく開発された地域と古くからの地の方と混在する地域であり保護者の方が学校周辺の地域を知らず、児童の活動を通して地域を共に築き上げていく。

・教育活動を本校から発信していくことで地域力を高めていくことにつなげていく。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

・事前の活動（学級行事+学級活動）　７月　「避難訓練を振り返ろう」

実際の災害を想定することで、調べる活動や実際に行動しようとするときの根拠となるようにしていくことができた。

・探究活動１（８～９月）　「防災に関わる人々について調査しよう」

実際の地震の映像を見たり、自分たちの地域が災害に関わる可能性がある事実を知ったりすることで、防災の意識を自分のこととして捉えようとする意識の高まりがみられた。

・探究活動２（９月～１２月）　「上作守り隊の活動を考え、実行しよう」

実際に災害時に活動した子どもの様子を知ることで、自分たちにもできることがあるという意識が芽生えるようにする。専門的な知識をもつ方の話を聞くことで、根拠をもって活動に取り組めるようにする。避難訓練や授業参観の場を活用した。

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・実際に他校での取り組みや様子について教員が研修した事が財産となり、児童に伝えていくことができた。
紹介用に防災グッズを購入したり、児童個々の資料として書籍をそろえたりすることができた。

・コロナ禍のため、大々的な地域に向けての発表はできなかったが、授業参観において保護者の方へ。学年内の発表も行うことができた。試験的にZoomにより他学年に様子を伝えることができた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・防災学習に関するカリキュラムを新たに位置づけてきた。学校全体に広めていくために発達段階に応じた指導を計画的に行うことができるようにしていく。児童一人一人の思考力・判断力・表現力等を育成していくことにつなげていくことができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・防災について学習するにあたり、防災を自分のこととして捉え、自分たち一人一人の行動が命を守ることにつながったり（自助）、いざというときに助け合う力（共助）となったりすることに気付くことができた。地域社会の一員として進んで防災のことを伝えたることが、今の自分たちにできることの一つとして積極的に行うことができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・災害時の具体的なとるべき行動について，児童・保護者が一緒に考えることで，児童のみならず保護者の防災に対する意識を高めることができた。地域に関しては今年度行うことができなかったが続けて広報していくようにする。

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

・今までとは異なり、保護者の参加や地域の人材の活用計画を立て、地域や学校に起こりうる災害に視点を当てた本校独自の防災教育の基礎を築くことができた点。

・系統的な防災教育や継続可能な視点から本校独自のプログラム作成に向けて始動した点。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

・学校全体の課題として地域に基づいた防災学習指導の構築。

・学校が地域コミュニティーの核となり、継続して取り組める体制の確立。

7）その他（※特にあれば記述）

※別途、補足資料などがある場合は、添付してください。　　（添付資料の　有　・　無）

学校名	2.川崎市立新作小学校
担当教員名	清田　賢治

活動のテーマ	防災・減災を考える～「問い」を活かした授業で防災・減災に迫る～
主な教科領域等	教科領域（特別活動・理科・社会）
活動に参加した児童生徒数	（　全学年　　４１２人）（複数可）
活動に携わった教員数	１６　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	０　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　２０２０年　６月　　～　　西暦　２０２１年　　１月
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

防災リテラシーの育成を通して、児童だけでなく、教職員も含め「災害時に生き抜く力」に気づき、またその力を育成する。

※防災リテラシーとは
自然災害の発生メカニズム、地域の自然環境や過去の災害、防災体制の仕組みなどをよく理解し、災害時における危機を認識して、日常的な備えを行うとともに、的確な判断の下に自らの安全を確保するための行動を迅速に取れる能力。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

	防災教育チーム	学校危機管理チーム
６月	・各学年のカリキュラムの中で、どのような防災教育ができるか検討 ・指導計画立案	避難訓練の計画立案
	物品購入計画作成	
７月～1月	授業実践 1年　特別活動 「へやの中のあぶないポイントをみつけよう」 2年　特別活動 「じしんから自分をまもろう」 3年　社会 「地いきの安全を守る～火事からまちを守る～」 4年　国語「もしものときに　そなえよう」 5年　理科「わたしたちのくらしと災害」 6年　理科「大地のつくりと変化」	避難訓練の実施（全６回） ・地震発生時における初期行動 ・火災発生時における初期行動 ・避難経路の確認 ・授業時における避難行動 ・休憩時における避難行動 ・６都市合同防災訓練参加 保護者引き渡し訓練（１年生） 班別での集団下校（２～６年生） ・不審者が校内に侵入してきたときの初期行動 ・職員体制の確認 ・児童への事前通知はしない抜き打ち訓練
	危機管理マニュアルの作成	

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

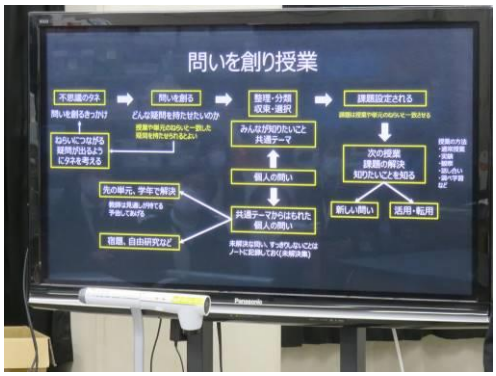
研修会の学びから

本校での昨年度までの防災教育は、主に年数回の避難訓練の事前・事後指導で実施していた。本プログラムへの参加により、今年度は教科・領域の学習の中で防災リテラシーを高めることを目的とした学習活動を実践することができた。授業計画においては、９月の研修会の資料として頂戴した気仙沼市教育委員会の「防災学習シート」が大変参考となった。

助成金の活用

○講師を招いての研修

課題を自分事として考え、課題に対する問いをもち、主体的に学びに向かう姿勢を育成するための授業改善を狙いとし、立正大学心理学部特任教授 鹿嶋真弓先生・桜美林大学教職センター教授　石黒康夫先生を講師に招いて、「問いを創る授業」について職員研修を行うことができた。



○大型ホワイトボード

グループでの話し合いに活用することで、友だちの意見に触れて自分の考えを広げたり、深めたりする姿が見られた。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

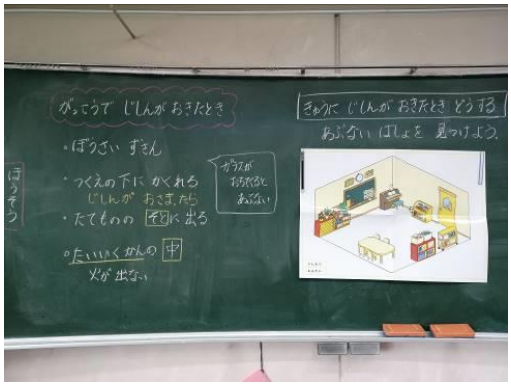
実際に地震が起きたとき、大人の目が必ずあるとは限らない。避難訓練も学校では計画的に行っているが、避難の仕方とは別に、「自分の命を守る方法を考える」という意味で、今回全クラスでの一実践を行ってよかった。

全体を通して、児童一人一人が主体的に学習に参加して課題に取り組むことができたとともに、先生の指示を待つのではなく、地震が起きたときに自分から避難行動をとる方法を考えたり、自分の住んでいる地域の特徴を踏まえて自然災害から身を守る方法を考えたりすることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

低学年

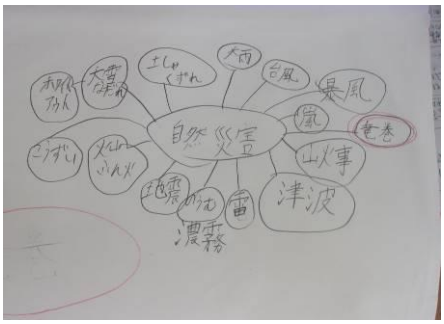
「部屋の中ではどんなところが危険か」や「通学路で地震が起きたらどうするか」という内容の学習を通して、避難訓練の合言葉「おかしも」の他に、「おちてこない、たおれてこない、いどうしてこない」ところで身を守るということは、どの場所でも共通する避難行動だと気付きが広がっていた。

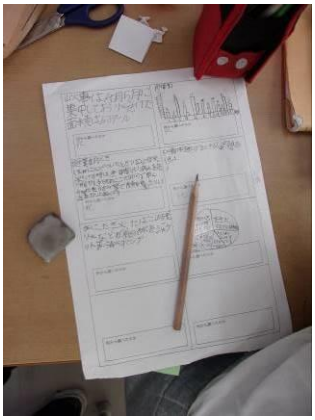


中学年

単元の初めに近年起こっている自然災害について、知っていることを話し合うことで、いつか自分の身に起こるかもしれない自然災害についての知識や備えの必要性について気づくことができた。

自分が知りたい自然災害のテーマを選ぶ中では、「おじいちゃんの家が雪国だから大雪のことを調べたい。」「台風に備えて家の人が、食料を備蓄していたから、台風の備えについてもっと知りたい。」など、自分と関係があるテーマを選ぶ児童が多くいた。そのため、調べ学習にも意欲的に取り組むことができた。調べて考えたことを友だちと伝え合う学習においては、自然災害に対する友だちの考えを聞くことで、さらに防災に対する意識が高まった。





高学年

５年生の実践では、教科書に載っている資料や写真だけでなく、自分たちの地域のハザードマップや避難所マップを活用したことで、防災や減災が身近でしっかりと行われていることを知ることができた。
また、自分たちの命を守るためにはどんな行動をとったり、どんな備えをしたりすることが必要なのかを具体的に考えることができた。

６年生は、理科の校外学習での地層見学と関連付けて実践を行った。「こんなに身近に地層が見られる場所があったなんて驚いた。」というものもあり、自分たちの住んでいる地域の大地について学ぶことで、防災や減災に関して、深く関心をもつことができたように感じている。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

児童だけでなく、まず教職員が防災教育への意識を高めるとともに、その指導法を学ぶために、全クラスでの１実践を行った。学年で授業計画を話し合ったり、授業を実践したりすることを通して、教科・領域の学習活動において防災教育を行うことの効果について実感することができた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

本校は、本プログラムへの参加以外にも、川崎市教育委員会の防災教育研究推進校として防災教育の推進に取り組んだ。その拠出金で購入した防災教育用教材（大型絵本、防災カードゲームなど）も活用して実践に取り組んだ。

また、本校の校内研究として取り組んでいる「課題を自分事として捉え、課題に対する問いをもち、主体的に学びに向かう姿勢を育成するための授業改善」の視点から、子どもの興味・関心や既存の知識とのずれから生まれる「問い」を大切にした授業づくりを意識しながら防災教育の実践を行った。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今回はインターネットのホームページからイラストを出力したものや、購入した防災教育用の教材を掲示したが、より学習課題を自分事として捉えさせるのであれば、実際の通学路の写真を撮って教材にするのもよいと思った。そうすることで、より具体的に自分の命を守る方法を考えることができると感じた。

また、事前に一人一人の防災意識について家庭ではどんな取り組みをしているか等のアンケートをとり、学校での防災教育の活動についてお知らせする機会をつくると、地域としての防災意識も高まると考える。

今後、小学校生活６年間を通して防災リテラシーを身に付けていくため、毎年の実践を見直していくとともに、本校独自の防災教育カリキュラムを作成していきたい。

学校名	3. 山梨学院小学校
担当教員名	小林　祐一

活動のテーマ	低中学年児童も防災・減災に関する知識に日常的に触れることができる学習環境づくり
主な教科領域等	教科領域（「登校時から下校時までの日常生活全般」をベースに、「理科」「生活」）
活動に参加した児童生徒数	（　１学年　７６人　）（　４学年　７６人　）　計　１５２人
活動に携わった教員数	４　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	１５２　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　２０２０年　８月　３１日　～　西暦　２０２１年　３月　５日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（火山噴火・豪雪）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

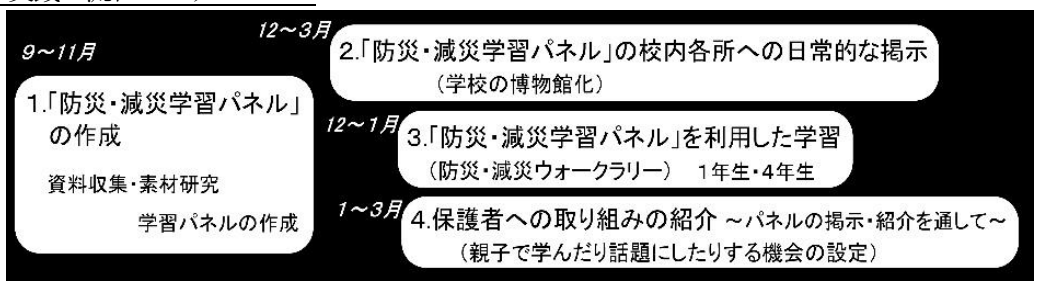
①活動の目的

本活動の目的は「低中学年の段階から、児童の内面に一定程度の防災・減災に関わる知識（what や why）や関心を培うこと」にある。それによって、従来から行っている避難訓練（how）や高学年の教科における防災・減災の学習の効果を高めていきたい。

②目的の設定にいたる背景

県内の広範囲から児童が通学する本校では、災害時に、いかに行動するか（how）を学ぶ防災訓練は計画的に設定されているものの、この地（山梨県）にどのような災害リスクや災害の歴史が存在し（what）、なぜそれがリスクなのか（why）を学ぶ学習の機会は、対象となる災害が多種広範囲にわたることから、必ずしも十分ではない。特に低中学年においては、上記の what や why を学ぶ機会や教材、そして時間は決して十分とは言いがたい。そこで、広く全校児童（特に低中学年児童）が防災・災害に関わる多様な知識を身につけたり、関心を持ち続けたりするために、「学校全体の学習環境づくり」によって、「朝の登校時から休み時間を含む下校時までの日常生活全般の中」で、これらの知識に触れることができるようにする。また、これをベースに教科の時間における学習をリンクさせ、上記の目的を達成したいと考えた。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール



①「防災・減災学習パネル」の作成……地震、火山噴火、台風・大雨、大雪の４つのカテゴリーで、災害の概要や過去の被害等をまとめたパネル（A1 サイズ 24 枚）とその学習ガイド計 30 枚を作成した。

②「防災・減災学習パネル」の校内各所への日常的な掲示……作成した学習パネルを、校内の階段やスロープ等、児童や来校者の目に触れる場所に掲示した。

③「防災・減災学習パネル」を利用した学習……１年生と４年生を対象に「防災・減災ウォークラリー」を実施した。１年生は生活科「安全なくらし」と、４年生は理科「雨水の行方」と関連づけて実施した。

④保護者への取り組みの紹介……児童の学習時期に合わせて学校ホームページで紹介した。コロナ禍による保護者来校行事の中止や変更が生じたため、全校の保護者を対象としての紹介は３月の参観日に実施する。

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①「発達段階を踏まえたカリキュラム開発」の視点を学び、「防災・減災ウォークラリー」の問題数やふり返りの設問を１年生と４年生で変えて実施した。また、「防災学習シート」の冊子を参考に「防災・減災学習パネルの見方・学び方」のパネルを追加作成して、児童自身によるパネルの内容読み取りをうながした。

②「震災後の避難状況」を学び、「防災・減災学習パネル」の内容に火事や停電、交通機関の麻痺等、災害の後に顕在化する二次的な被害を取り上げた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・パネルの掲示という「学校全体の学習環境づくり」によって、低中学年を含む全校児童に対して当地に存在する自然災害の種類や過去に生じた被害等の知識を得ることができる環境を整備することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・作成した「防災・減災学習パネル」を日常的に掲示することで、掲示後の半月で半数の児童が一定程度、内容に目を通した。さらに、実施方法に変化をつけた２回の「防災・減災ウォークラリー」によって、参加した全員の児童が、この地に存在する災害リスクや災害の歴史を学ぶ経験を積んだ。

・学習後のふり返りから、児童が特に印象的に学んだ内容は、①富士山噴火の歴史や可能性、②当地における過去の災害の様子（洪水や大雪）、③自然災害（地震や大雨、噴火）の際に生じうる被害の内容であった。このことから今回の活動が、低中学年の児童を、従来の教科学習では扱いきれていなかった防災・減災につながる内容に興味をもって学ぶ上での橋渡しの役割を果たしたと考えられる。

・「防災・減災学習パネル」の内容は、低中学年の学習指導要領で扱う範囲を超えた発展的な内容であるが、校内ウォークラリーの形式を取り入れたことにより「難しいけれども（知ることが）楽しい」（児童談）という意識で学び、自然災害についての興味を持つことができた。特に４年生のふり返りからは、１回目から２回目へと学習を重ねることで、理解を深め、より多くの興味をもつようになった様子がうかがえた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・「防災・減災学習パネル」作成の過程で、教師自身がこの地における過去の災害の歴史や、現在の各市町村のハザードマップの内容について、多くを知ることができた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

①「防災・減災学習パネルの作成」では、低中学年児童にも分かりやすいものとなるよう、１枚のパネルにつき１つのテーマに絞り込み、「問い→答え→解説」の３段階を基本のフォーマットとした。 また、平易な言葉遣いやふりがな、図や写真の多用に努め、“目で見てわかる”ように心がけた。

②「防災・減災ウォークラリーの実施」では、児童の興味・関心を喚起し、なおかつ理解が深まるよう、方法に変化をつけて２回にわたって実施した。

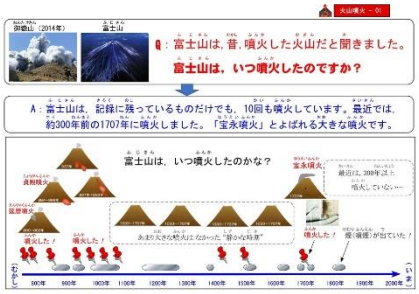
6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

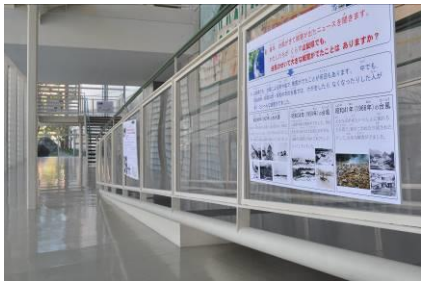
①「学校の博物館化」をうたった校内各所へのパネル掲示は、日常生活の中で防災・減災にかかわる情報に触れるという意味で有効である。一方で、掲示しただけでは、内容の読み込みに至らない児童も一定の割合でいるので、今回のように授業での活動と組み合わせることが効果的である。

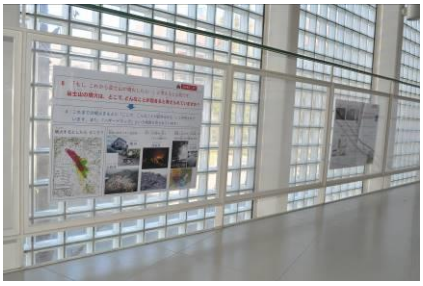
②パネルの内容の読み取りに難しさを感じた児童も一定の割合で見られた。居住する地域における自然災害のリスクや過去の被害について、いかに平易な表現で伝えるかは、さらに検討を要する。

【添付資料】

①作成した「防災・減災学習パネル」の一例とその掲示の様子



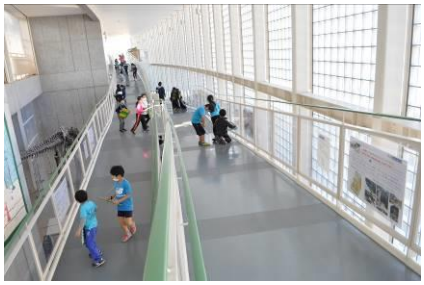


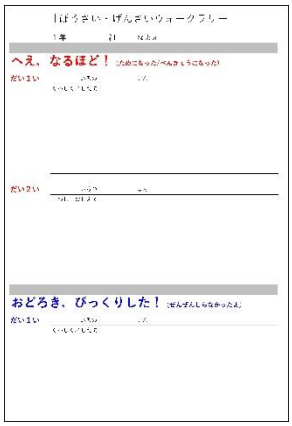


「地震」「火山噴火」「台風・大雨」「大雪」の４つのカテゴリーで作成し、

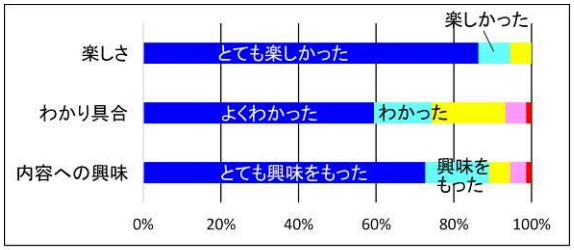
廊下やスロープ、階段の各所に掲示

②「防災・減災ウォークラリー」の様子と学習カード

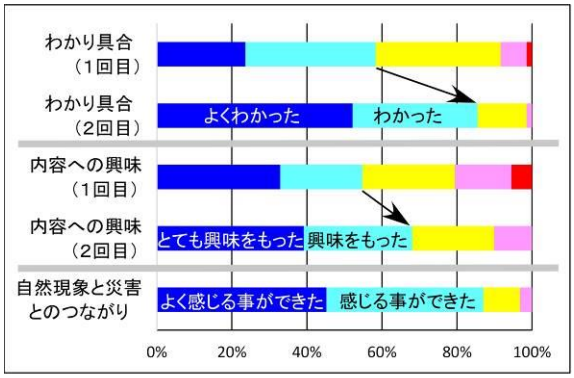




③「防災・減災ウォークラリー」実施後の児童の意識（事後アンケートの集計）



1年生「防災・減災ウォークラリー」のふり返り



4年生「防災・減災ウォークラリー」のふり返り

学校名	4. 犬山市立楽田小学校
担当教員名	古市　博之

活動のテーマ	教科に関連した地域教材を活用することで、自然災害が身近に感じられることを目指して ー理科学習をベースにしたカリキュラムマネジメントー
主な教科領域等	教科領域（　理科　・　社会　・　学活　）
活動に参加した児童生徒数	（　4・5・6学年　２９３　人）（複数可）
活動に携わった教員数	１２　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	不特定数　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　２０２０年　9月３０日　～　西暦　２０２１年１１月２７日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

本校の特性を活かし、教科学習を最大限に生かし関連させるカリキュラム・マネジメントを、社会と理科をベースに行うことで、防災・減災の意識を子供たちに育てることを目指す。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール

小学４年

6月：地図の読み方〔社会〕→9月：流れる水〔理科〕→１０月：入鹿池の氾濫と対策〔社会〕→１１月防災新聞〔学活〕

小学５年

6月：低地のくらし〔社会〕　→　１０月：木曽川の上流中流下流〔理科〕　→　１１月：生活と治水〔社会〕

小学６年

5月：古墳時代〔社会〕→１１月：大地の変化〔理科〕→１２月：五街道の整備〔社会〕→1月：街づくり〔総合〕

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

① 校内で体制を組んで実践することが可能となり、効果的なカリキュラム・マネジメントとなった。
② 効果的なICT機器（ドローン）を購入することができ、新しい視点の教材を作成できた。また、作成した教材に他校や地域施設の渉外担当者が興味を示し、授業等で活用することになった。
③ これまで地域連携は、負担削減を理由に縮小傾向となっていたが、持続可能な連携として地域連携の事業として実施することとなった。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・持続可能なカリキュラム編成ができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか

・全　体　学習した内容をまとめる力
・６年生　地域との関連性を知ることで、大地の変化に関する実感を持った。
・５年生　本地域が水害の危険性がある土地であることを学んだ。
・４年生　過去に起こった災害を学んだことで、身近に災害が起こることを実感した。

③　教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・社会科が専門の教師と理科が専門の教師が知恵を出し合って、カリキュラムの構築を行った。

・地域関係機関との接点が生まれ、活動を出発させることができた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・ドローンによる地域素材の教材開発

本助成でドローンによる空中からの映像を活用した教材開発を行った。効果は絶大で、児童は映像を見るだけで、地域の特徴である地形を十分に理解した。今後は、映像を増やし、犬山市の地形の全体像がつかめるような展開もできうる可能性を感じた。

・理科と社会とのカリキュラム・マネジメント

楽田地区の特性を理科の視点だけではなく、社会の視点からも追求した。古墳時代・戦国時代・江戸時代に本地区はホットスポットといえ、防災にも関連したエピソードがある。児童にも本地区における学びがアイデンティティに結びつけることができた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

犬山の東部丘陵地は、焼き物が盛んだったため以前はハゲ山であった。雨で土石流が発生することが多く、森を再生するために**東京大学が演習林**をつくり、森を再生させた経緯がある。また、木曽川の治水に関する歴史は古く、更なる**空中からの映像**などの新たな教材開発をし続けることで、より児童にとって有効な素材を作成することができると考える。まだまだ地域素材を丁寧に掘り起こし、子どもたちに本地区におけるアイデンティティを感じさせる様、教材研究をしていきたい。

19　名古屋☆　2021年（令和3年）3月10日（水曜日）　中日新聞

学ぶ　東日本大震災10年　児童生徒 探る地域の減災

災害調べ 伝える教訓

日本ユネスコ協会連盟の「減災教育プログラム」を活用し、中部地方の児童生徒が過去の自然災害から学んでいる。十二日で発生から十年を迎える東日本大震災をはじめ、御嶽山噴火、濃尾地震、三河地震。多数の死者を出した被害の実態を学ぶ事と重ね合わせ、身近な問題として防災意識を高めている。（宮崎厚志、白井春菜）

長野県安曇野市の堀金中では三年一組の生徒が昨年七月から四カ月、総合学習の時間に十二テーマに分かれて過去の災害を調査。「必ず当事者の話を聞いた黒岩和業さんは「災害が自分の身にも起こり得ることを、みんなに知ってほしい」と強調。調べてまとめるだけでなく、当事者意識を持って自ら発信する大切さに気付いた。黒岩教諭は「命と向き合う探究的な学習で得たものは大きい」と話す。

■　■

愛知県犬山市の楽田小は四～六年生が地域の地形の特徴と過去の災害を調査、死者七千二百七十三人の濃尾地震（一八九一年）や死者九百四十八人の人吉地震（一八六八年）の状況を知り、今後起こり得る災害を考えた。

ドローンを購入し、市内の上空百メートルから地上を撮影。児童は映像を見て「木曽川が近い」「家のすぐそばに山がある」と話し合った。「台風など見学し、高等部の生徒の一部は授業で外部講師に使い方を教わった。

田中美幸教頭は「避難所の雰囲気や、非常食や簡易トイレなどを知っておくことは重要」と特別支援学校での避難所体験の意義を話す。同校の体育館は市の「補助避難所」に指定されている。新型コロナの密対策で、避難者を「指定避難所」で収容し切れない場合に開設することが想定されている。

■　■

校区の住民や児童も含め二千三百六人がとどまった三河地震（一九四五年）を学んだ愛知県安城市の明和小。五年生が総合学習の時間を中心に、学校に残る震災記録を読み、発生時に小学生だった住民の体験談を聞いた。近くの製紙会社の協力で段ボールのベッドを作ったり、市民団体のメンバーと非常食を試食したりした。担任の小野内博史教諭は「この学校の児童が二十三人亡くなった震災記録や体験した人の肉声はリアル。子どもたちは『学んだことを地域の人に伝えたい』という思いを強くしたようだ」と話した。

避難所を体験　特別支援学校

自閉症や発達障害のある子どもは環境の変化に敏感で、災害時に避難所で泣き叫んだり動き回ったりすることがある。やむを得ず自家用車や被災した自宅で過ごす家族も少なくない。

愛知県一宮市の県立一宮東特別支援学校は1月、体育館にテントやパーティション、簡易トイレなどを並べて「模擬避難所」を設置し、非常食も展示した。小学部から高等部までの児童生徒と保護者が

日本ユネスコ事業　当事者意識を育む

減災教育プログラム　完全に防ぐことは難しい自然災害の被害を最小限に抑える「減災」を目指し、防災・減災教育を支援する事業。高校に無償で通ばれた小中学校、高校に延期訪問する教員研修や、参観校の教員研究会に専門家や教職員が意見交換するフォーラムを催す。アウサ生命保険が協力する。2014～20年度に延べ163校、約6万人の児童生徒、教員、地域住民が参加した。新型コロナウイルスの影響で、20年度はオンラインで開催。

在学、現職と、社会（地域）の歴史を関連付けて授業を展開。学んだ内容を一人ずつ新聞にまとめた。

入鹿地は学校から約三・六キロ。四年鈴木雅小君は「自分の家は新しくて頑丈だし安全だと思っていたけど、もしもに備えるのが大事」。古市博之教諭は「防災とは土地の高さや周辺環境を知ること。子どもたちは災害を身近な問題として捉えるようになった」と振り返った。

■　■

学校名	5. 安城市立明和小学校
担当教員名	小野内博史

活動のテーマ	三河地震を調べ、その経験を防災に生かす総合的な学習の時間
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間）
活動に参加した児童生徒数	５学年６２人
活動に携わった教員数	２人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	２００人　【保護者・地域住民・その他（安城防災ネット、安城市危機管理課、企業）】
実践期間	西暦２０２０年6月３日～西暦２０２１年3月２４日
想定した災害	地震

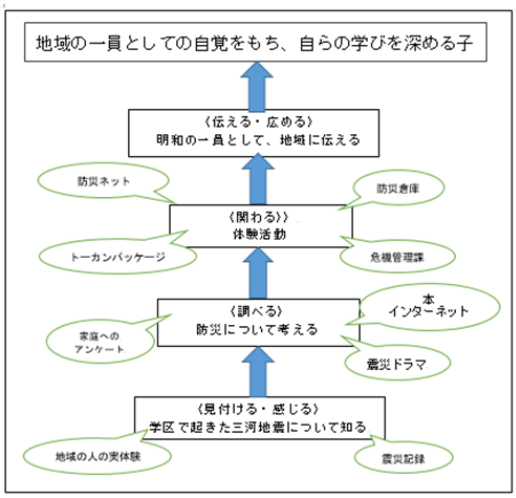
活動報告

1）活動の目的・ねらい

本校学区は、安城市の南端に位置し、昭和 20 年（1945 年）には、震度 7 を記録する三河地震があり、この地域を含む旧明治村は、325 人の死者と多くの家屋が全壊、半壊をする被害があった。それから 75 年たち、この地震を経験した住民も少なく、この地震があったこと自体を知る人も少ないのが現状である。一方今後起こるであろう南海トラフ地震では、本地域も大きな被害を受けるだろうと言われている。

本地域は、昔ながらの景観が残るとともに３世代以上同居も少なくない。このような地域で、過去に起こった三河地震を探るとともに、南海トラフ地震をはじめとする地震への防災を児童が学ぶことで、家庭や地域へより防災意識を高めることができると考えた。また児童自身が、将来にわたって防災意識を持ち続けるとともに地域に積極にかかわり、いざというときに大きな力となるようにしたいと取り組んだ。

・地域の一員としての自覚をもち、災害時に自ら安全な行動ができる。
・状況に応じて、主体的に判断し、自他の命を守ることができる。
　→過去の地域の災害に主体的にかかわり、それを教訓に、これから起こるであろう地震に対して、的確な行動がとれるようにする。
　→地域住民の一員として、進んで地域に関わっていこうとする。



2）実践内容・実践の流れ・スケジュール

1　三河地震とは、どのような地震だったのだろう。６月～８月
　・歴史家の話　・本校に残る「震災記録」を読む
　・三河地震についてのアンケート（学区）
　・体験者の話を聞く　・三河地震新聞の作成

2　南海トラフ地震とは、どのような地震だろう。９月
　・ハザードマップ　・学区に予想される被害の把握

3　地震に備えて、どのようなことができるだろう。９月～１月
　・保護者への防災意識に関するアンケート→集計
　・防災倉庫、備蓄品の確認
　・防災体験（避難所体験）　マンホールトイレの設置、マイトイレ
　・非常食のアレンジ、試食
　・我が家での防災対策　持ち出し・防災バッグの中身
　・快適な避難所生活を考える（過去の震災から学ぶ）→自分たちにできることを考える

4　東日本大震災から学ぼう
　・東日本大震災とは、どのような地震だったのか。
　・絵本や動画を見て、東日本大震災の事実からいかせることはないか、考えよう。

5　学んだことを家族や地域に伝えよう。２月～３月
・「防災発表会」の開催→緊急事態宣言発令に伴い中止→防災報告書の作成→家庭・地域へ
・リーフレットの作成・回覧板の活用→地域へ発信

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。　昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・前半の学習は、三河地震について調べ、知ること、そしてそこから学んだことを生かすことを中心に行った。資料や映像だけでなく直接話を聞くことができ、児童にとって興味関心を高めた。（助成金の活用）
・後半の学習では、特に２つのことについて、考えさせる授業を行った。
（自助）自分の命をいかに守るか。
・緊急地震速報の意味を知り、非常時に持ち出すものを考え、非常食を実際に試食するなどの学習を通して、自分の命をいかに守るか、考えることができた。（助成金の活用）
（共助）避難所生活を快適にするにはどうすればいいか。
・何が必要か、どう行動するか、自分に何ができるか。
東日本大震災や熊本地震など、避難所が開設された写真や動画、新聞記事や本などから、考え、自分なりの考えをもつことができた。

4）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

・自分たちの地域で起こったのに、父母でさえ知らない三河地震を調べる活動を切り口に、防災について学習を進めたことで、児童の意欲を高めることができた。
・三河地震について、地域住民のアンケート回答を集計したり、証言の映像を見たり、体験者の話を聞いたりすることで、自分たちの地域の防災に対する課題を見つけることができた。
・様々な体験をすることで、いざというときに、自分から行動できるように取り組んだ。いざというときに役立ちそうと考えることができたとともに、自分だけでなく、家族や地域にも知ってほしい、広めたいと考える児童の姿を見ることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・災害の映像を見る場や専門的な知識や経験のあるゲストティーチャーと直接かかわる場などの体験活動を行ったことで、地震そのものの被害の怖さだけではなく、避難生活の大変さに気付くなど、さまざまな視点を得ることで、防災意識が高まった。さまざまな体験活動を実施し、避難所生活の大変さや少しでも快適に過ごすための工夫に気付き、自分たちにできることは何かについて視点を広げて考えることができた。児童は、体験活動を通して自分たちに必要なものは自分で備蓄をしておかなければならないと、自助の大切さに戻って考えることができた。そして地域に意識を向け、地域の問題点に気付き、地域の一員として地域に協力したいという共助の思いをもつことができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・地元にあるダンボール製造工場が、避難所になった際のベッドやパーテーションを作っていることを知り、学校に招いて、その実演をお願いした。たくさんの材料を用意していただき、子どもたちが自分たちでダンボールベッドやパーテーションを組み立てていくことができた。企業にとっても初めてのことだったが、貴重な経験となったという声をいただいた。
・学区にある町内会では、今年度は新型コロナ感染症予防のため、これまでのような防災訓練を行うことができなかった。児童が地域で起こった過去の震災を調べ、これから起こるであろう震災やその防災について学習していることを地域の人に知らせるために、教師が防災訓練に参加し、活動の様子を報告する機会を得た。児童が作った新聞や資料を配布して、説明した。「子どもたちがこんなに調べていることに感動した。町内会ももっと防災に対して取り組んでいかないといけない」という声を聞いた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・昭和20年「三河地震の震災記録」を読む
学校に残された震災記録の実物を提示、印刷して児童が実際に読む。戦時下で記録が少ない中、貴重な資料に、被害の様子、死者の数、学校や職員の対応などを見ることができ、三河地震や自分たちの地域の災害への興味・関心を高めることができた。
・地域の協力
三河地震については、体験した人の高齢化に伴い、生の声を聞くことが難しくなってきている。町内会に相談したところ、回覧板を使ってアンケートを取ったり、話ができそうな人を探してもらったりすることができた。直接体験した人や、その人から聞いたことなど、いくつかの情報を得ることができた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

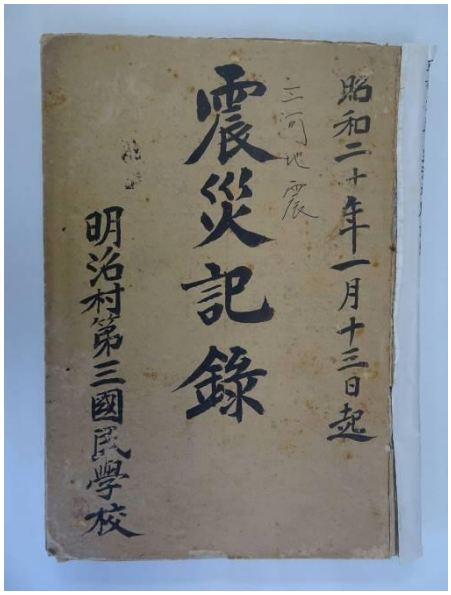
・今年度は発表会が中止となり、地域に発信する場ができなくなったのは残念であった。最後に発信するのではなく、継続的に発信する機会を設けて、地域に主体的に関わり、地域の一員として適切な判断や行動ができるような工夫をしていきたいと考える。

歴史家から「三河地震」の話を聞く

三河地震体験者の話を聞く

三河地震証言者の DVD を視聴

「震災記録」を読む



本校に残る「震災記録」

三河地震について新聞を作成

ハザードマップを調べる

南海トラフ地震対策啓発ドラマを視聴する

ダンボールベッドを組み立て、横になってみる

パーテーションを組み立てる

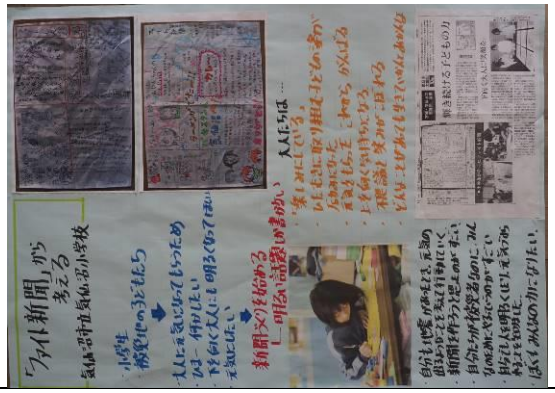
マンホールトイレを設置する

非常時にトイレをどうするか

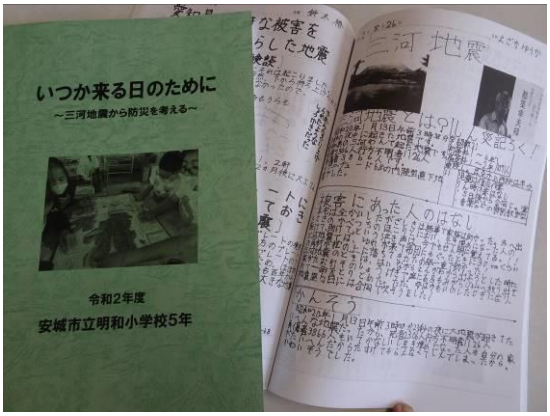
アルファー化米を試食する

乾パンをアレンジしてピザ風に

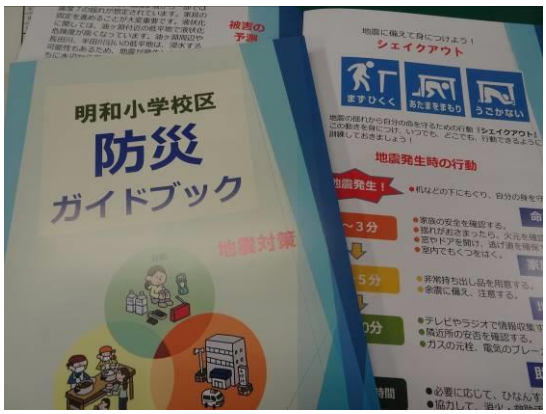
東日本大震災から学ぶ



東日本大震災から学ぶ



学習のまとめの作成



防災ガイドブックの作成

学校名	6. 大治町立大治南小学校
担当教員名	児玉やこ

活動のテーマ	自分の命を守り、助け合って生き抜くことができる児童の育成 ～ＳＤＧｓの視点で防災・減災を考える～
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間・生活科・学級活動　）
活動に参加した児童生徒数	（　　１～６学年　　６４０人　）（複数可）
活動に携わった教員数	２５　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	８　人　【保護者・地域住民・その他（大治町防災危機管理課職員・NPO 法人あいち防災リーダー育成支援ネット所属の方）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　２０２０年　１１月　１６日　　～　　西暦　２０２１年　３月１２日
想定した災害	地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　火災　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

- 小学生のうちから防災に対する意識を高め、正しい知識や技術を身に付けさせることで、自分の命を自分で守ることができる児童を育成する。
- 災害に遭ったときに助け合う大切さを学び、大治町の防災対策について知る中で、災害に強い持続可能な大治町を創る担い手となる児童を育成する。
- ＳＤＧｓの視点をもって防災・減災の課題について考えることで、世界の課題にも目を向け、持続可能な世界になるよう貢献できる人材を育てる。（国際理解教育）

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

実践の柱　①ＳＤＧｓについて知り、ＳＤＧｓの視点で防災や減災、世界の課題について考える。
②大治町防災危機管理課の職員を講師として招き、住んでいる町について考える。
③地元で活躍するＮＰＯの方を講師として招き、新しい防災・減災の知識を得る。

実践スケジュール

学年	月	プログラム	授業者･連携団体	○助	SDGs	時間数
6	11	SDGsと世界の課題	校務	国際	全	総3
	1	避難所体験	大治町防災危機管理課	公･N	全	活2
	2	地震が起きたら･･･	NPO	自･共	11	活1
5	11	SDGsと世界の課題	校務	国際	全	総3
	12	ゲリラ豪雨の原因は？（SDGs）	校務･担任	国際	13	総1
	1	ハザードマップで防災力アップ	大治町防災危機管理課	自･公	11	活1
	1	水消火器体験	大治町防災危機管理課	自･共	11	活1
4	12	ゲリラ豪雨の原因は？（SDGs）	校務･担任	国際	13	総1
	1	1年生と防災かるた	担任	自･共	17	総2
	2	持ち出し袋をつくろう	NPO	自	2･3	総1
3	3	校舎内の危険箇所や避難の仕方	校務･担任	自	4･11	活1
	3	2年生に伝える	担任	共	17	総2
2	2	新聞スリッパ	NPO	自	11	活1
	3	3年生から教わる	担任	自	17	生1
1	1	4年生と防災かるた	担任	自	17	生1
	2	防災絵本の読み聞かせ	NPO	自	11	活1

※黄色…２・３月で実施予定　　※灰色…感染症防止の関係で今のところ実施未定

実践の様子

柱①　*ア「ＳＤＧｓと世界の課題」*…世界と肯定的に出会い、環境（パーム油による森林破壊）や人権（カカオ農場の児童労働）についての課題に、自分たちが関わっていることを知り、課題解決に向けて何ができるかを考えさせた。また、世界中でＳＤＧｓ達成に向けて協力していくことが必要であると学んだ。(ワークショップ形式)

イ「ゲリラ豪雨の原因は？」…地球温暖化の主な原因は二酸化炭素であること、地球温暖化により気候変動が起こり、異常気象・ゲリラ豪雨が増えることを学んだ。それらの災害の増加を止めるには、二酸化炭素を減らす必要があり、自分たちができることを考えた。

柱②　*ア「避難所体験」*…前半は、大治町の避難所の場所や避難所運営について説明を聞き、避難所運営にもＳＤＧｓが関わっていることを知った。
後半は、「発電機・投光器」「簡易トイレ・テント」「段ボールベッド・間仕切り」のコーナーに分かれ、組み立て方や使用方法を体験しながら学んだ。

イ「ハザードマップで防災力アップ」…大治町のハザードマップの見方を教えてもらい、洪水や地震、台風、火災などの災害が起こったときに、学校や家がどのような被害に遭うのかを確認した。また、その時、どこへどのように避難するとよいかを学んだ。

ウ「水消火器体験」…先述のイにおいて、火事を発見したときの行動の一つとして消火器の使い方を教わった。その後、実際に水消火器で使い方を確認しながら体験した。いざやってみると、戸惑う場面もあり、体験することの必要性を感じた。

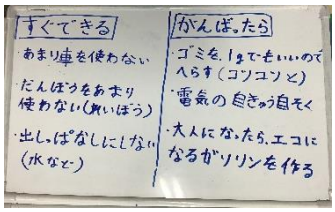
柱③　*ア「揺れに備える」６年*…はじめに東日本大震災の映像を見せてもらい、揺れの大きさや建物の崩壊、人々の避難の様子を目の当たりにした。また、南海トラフ大地震が起こる可能性が高いことや、今できる備えについて教わった。その後、「紙ぶるる（応用地震計測）」を使って、建物の構造や揺れ方を実感し、筋交いや屋根など工夫できることを学んだ。揺れに強い家や街づくりが、SDGｓのゴール１１に関わることに気付いた。

イ「非常持ち出し袋をつくろう」４年…１人１台のタブレットを使って、避難する際の持ち出し袋に何を入れるか考え、発表し合った。保温シートの使い方やビニル袋、新聞紙、キッチンラップのさまざまな活用方法を教わった。また、いろいろな種類の非常食の紹介を聞いた。その中で、賞味期限や消費期限、ローリングストックの話も聞いた。児童は、家庭で非常持ち出し袋を作ってみたい、中身を確認したいと意欲をもった。

ウ「新聞スリッパをつくろう」２年…避難所生活をする際に、身近にあるもので工夫してできるだけ快適に生活する方法を学ぶため、新聞スリッパづくりに挑戦した。作った新聞スリッパを履いて歩いてみると「意外と丈夫だな」「温かいな」という声が聞こえた。新聞紙には、スリッパの他にも座布団やごみ箱など、さまざまな活用法があることを知った。

エ「防災絵本の読み聞かせ」１年…紙芝居「じしんがきたゾ～」を読み聞かせしてもらい、地震が起こったらどのような被害が出るのか、避難所にはどのような人がいるのかなど、地震後の行動について学んだ。また、食物アレルギーのある人は避難所での食事にも気を付けること、周りに食物アレルギーの人がいたら優しく接することが大切であると知った。その後は、机の脚をしっかりと持って、机の下にもぐる練習と、だんごむしのポーズ（シェイクアウト）の練習もした。次の日の避難訓練では、学んだことを実践できた。

【派生図で考えを広げる】



【私たちにもできる！】

【丈夫で寝心地いいなぁ】

【家にあるかな？】

【消火器重いなぁ】

【２階は揺れが大きいよ】

【何が必要かな？】

【寒いときに大活躍！】

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

〈つながりを創る〉　大治町やＮＰＯとつながりを創ることで、児童が地域とつながり、町を支える一人として行動できるように実践を組み立てた。また、地域だけでなく、ＳＤＧｓを通して世界ともつながっていることを実感させた。

〈持続可能な防災教育〉地域とのつながりを創り、実践計画を明示することで、学校の担当者が変わっても毎年、児童が防災・減災について学べるようにした。

〈教材の充実〉助成金で防災かるたや持ち出し袋の見本、書籍などを購入し、学びが深まった。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

・　町の防災危機管理課の方やＮＰＯの方に来ていただくことで、教員では教えられない専門的な知識や情報を子どもたちに伝えることができた。

・　体験活動やつながりを意識した授業を行ったことで、子どもたちに防災・減災について考える必要性を強く印象づけることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・　地域とつながることで、今まで遠くで起きていた災害が、身近なところで起こるかもしれないと自分事として捉えられるようになり、もしもの時のために備えることが必要であることを学んだ。

・　家に帰って、学んだことを家族に伝えたいという思いをもった子どもたちが多くいた。

・　ワークショップや体験活動など力を合わせる学びを通して、災害が起こった時も、みんなで協力することが大切であると気付いた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・　教師にとっても知らないことが多くあり、子どもたちや自分の命を守るため、さらに学びたいと感じた。

・　講師に招いた町の職員やＮＰＯの方からは、子どもたちが防災や減災について学ぶ機会を今後も設定してほしいという声をいただいた。また、６年生は公助という視点での活躍も期待されている。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・　「つながり」「持続可能」「ＳＤＧｓ」を常に念頭において実践した。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・　感染症予防から、グループでの協働や保護者を巻き込んでの活動や地域への発信ができなかったので、次年度以降で改善したい。

・　今年度で終わりにしないで、築いたつながりを維持し、防災・減災教育を続けていくことが大切である。

７）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

学校名	7. 神戸大学附属小学校
担当教員名	田中達也，内海紗恵

活動のテーマ	ICT 機器を用いた小学校低学年児童の避難行動決定プロセスの解明
主な教科領域等	教科領域（　特別活動，道徳　）
活動に参加した児童生徒数	（　1 学年　34 人　）（複数可）
活動に携わった教員数	2 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	3 人　【保護者・地域住民・その他（　大学協力者　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2020 年 9 月 1 日　　～　　西暦 2021 年 3 月 31 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 (地震)・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ (その他)（ 火災 ）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

現在の防災教育は刺激（サイレンや校内放送による避難情報）と反応（定められたルートを通っての一時避難場所への避難）で設計された教師誘導型の避難訓練が中心となっており，児童自身がその学びを生かしきれていないことが課題となっている。また，近年，防災教育においては，ICT 活用型避難訓練の実践がなされているが，中学生や小学校高学年が対象であり，低学年段階における ICT 活用型避難訓練の実践や学校での取り組みは見られない。本実践では，児童の災害対応能力を向上させるために，避難行動選択のプロセスを分析・検討し，実際に ICT 機器を活用した避難訓練を複数回実施し，低学年においても避難行動の意思決定が成立しているのかを明らかにすることを目的とした。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

具体的には，学校避難訓練をベースに，児童主体の避難訓練を全 2 回実施する。1 回あたりの避難訓練は，①事前指導，②実践，③事後指導を 1 セットに行う。避難状況は回を重ねるごとに負荷をかけ，避難行動の実態を把握した。本実践の内容としては，①~③のように考える。①事前指導では，防災の基礎知識の習得を目指し，災害の特性を理解させ，行動する際の留意などを示した。その際，リアリティを高めるために，防災センターでの体験活動を実施し，火災時には煙は上に上がることが多いことなどの知識や口をハンカチで覆うなどの避難の仕方（技能）を学ばせた。次に②実践では，グループで避難訓練を行った。これまで教員が引率する訓練ではなく，児童主体で避難先までのルートを考えさせ，避難行動をさせた。その際，校内において想定される避難経路に災害時に起こりうる危険な状況をトラップ（通行禁止）として用意し，児童がどのように危険回避しながら避難行動するのか，どこに注意をして行動するのかなどのデータ集積を行った。最後に③事後指導では，実践での発話記録や映像記録などを用いて，振り返りを実施し，児童と行動評価を行った。ここでは，児童の行動選択理由を明らかにし，学級で議論を重ねていくことで，これまで学んだ知識だけでなく，幅広い視野を持つことの重要性を児童と共有した。この一連の流れを複数回繰り返すことで，安全な避難行動の習得や児童の災害対応能力の向上を目指した。本実践後，従来の避難訓練（地震）を実施し，本実践での学びが生かされたか，本実践での避難訓練（児童主体）と従来の避難訓練（教師主導）との比較を行い，本実践の分析・考察・評価を行った。

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

東日本大震災で被災された学校の発表では，泥などで歩く場所が不安定であることやガラスや物が散乱していたこと，余震がいつ来るのか分からないなど，訓練では体験できない状況が災害発生時に起きることを伝えていた。この内容は，避難訓練におけるリアリティの重要性を示唆するものであり，多くの研究において「訓練のための訓練」に課題があることが示されている。本実践では研修会や助成金を受け，まず災害のリアリティをもたせるための環境設定を行った。また心拍計とウェアラブルカメラを導入し，避難訓練時に児童に装着させ，避難訓練時の緊張状態や避難行動における児童の視点を分析するなど工夫を行った。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

ウェアラブルカメラなどの ICT を活用した避難訓練を実施し，振り返りを行うことで，自分の行動を客観的に捉えることができた。実際に児童は，自身の記憶を頼りに「避難行動はしっかりできた」と主張していても，ICT を使って自分の行動を見直すことで，うまく動けていない（動けている）ことを認識し，自身の避難行動について客観的に，適切に自己評価できることが分かった。また，映像を見る事で，避難行動の成果や課題を見つけ出し，より安全な避難行動について考える姿も見られるようになった。以上のことより，避難行動を客観的に判断し，適切に評価するために ICT を導入することは有効であり，特にメタ認知能力の低い低学年においては，効果的であると考えられる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

本実践では事前指導において，明石市防災センターで災害に関する知識や避難行動に関する技能を習得させ，それらを避難訓練で発揮できるよう環境設定を行った。また，ICT を用いた振り返りにより，避難経路や避難行動の適切性を十分に議論できる場を設けた。この開発された一連のプログラムを実践することで，児童は災害特性に応じた適切な避難経路や避難行動を選択しようとする姿が見られた。この姿は児童が主体的に避難訓練に向き合う姿であり，本プログラムは，児童の災害対応能力を向上させることができていると言える。また，日常生活においても防災に対応する意識が芽生え，棚の上に物を置かない，出入口は塞がないなど，児童自身がいつ何時起きるか分からない災害に対して，自分の身を守ろうとする態度が身に付いている。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

本プログラムの実施により，児童自身の災害に対する意識が高まり，児童自らが中心となって家庭の災害対策を考えるきっかけづくりをしていることが保護者から聞かれている。具体的には，災害特性に応じた適切な避難行動を保護者に紹介したり，学校から自宅までの避難経路を一緒に考えたりなど，実践を重ねるたびに，獲得した知識や技能を伝え，広げることが出来ている。また，本プログラムにおける ICT を用いた新たな事後指導の在り方については，研究協力者である神戸大学工学部寺田教授からもその価値が見出された。具体的には，ICT を用いた振り返りにより，避難経路や避難行動において適切かどうかの視点や判断基準を児童自身がもつことができるようになってきていることである。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

本実践の特徴は，これまで教員主導（引率型）で行っていた避難訓練の流れを，児童が自ら考え行動する避難訓練に変更したことである。児童が試行錯誤できる環境を避難経路に設定することで，定められた経路をついていく従来の訓練とは異なり，災害特性に応じた避難行動を状況に応じて自ら主体的に判断し，選択させることができた。このことにより，災害時に活用できる知識・技能の習得や，思考力・判断力・表現力等の育成，つまりは，災害対応能力の向上を図ることができた。ここで培われた能力は，学校外はもちろん，生涯に渡って児童自身が自分で考え行動できる姿につながると考えている。また，ICT を活用した振り返りを行うことで，自身の避難行動を客観的に評価することができる力を高めることもできる。

特に，避難行動中の状況把握など，見落としの多い事項の確認や，行動選択の理由を議論するなど，映像を活用することで児童がその当時の状況をどのように捉えられていたのかについて再現性を高めることができる。以上のことはすべて，児童の災害対応能力を向上させ，防災に関する意識を高めることにつながっている。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

本研究では，低学年の避難行動の意思決定のプロセスについて，ICT 機器を活用し，事例的に分析を行った。本研究において得られた知見は，2 点である。1 点目は，低学年の避難行動の意思決定のプロセスである。災害に関する知識・技能を，体験を通して習得することで，学んだ知識・技能を発揮させながら主体的に状況を判断し，避難行動を選択できることが分かった。2 点目は，事後指導において，ICT を活用し，避難行動を客観的に振り返り，議論する場を設定することで災害対応能力を向上させることができることが分かった。今後は，本実践によって高まった災害対応能力の継続性について解明すると共に，主体的な避難訓練の価値を共有し，学校全体で実践できる組織作りを行いたい。

７）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

学校名	8. 広島県東広島市立三津小学校
担当教員名	堀口　寿恵

活動のテーマ	自分や家族，地域の方の命を守るために　三津っ子にできることをしよう！！
主な教科領域等	教科領域（　　総合的な学習の時間　　）
活動に参加した児童生徒数	（　４　学年　　１０　人）（複数可）
活動に携わった教員数	３　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	２５　人　【保護者・地域住民・その他（消防署員・支所職員・社会福祉協議会職員・復旧工事現場で働いている方・被災者など）】 ★ポスター配布先の人数は入っていません。 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　２０２０年　　月　　日　　～　　西暦　２０２１年　３月　　日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　高潮　）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

家族や地域の方に，自然災害への防災行動，自然災害発生後の減災行動の大切さを知らせる。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

（1）目的を考える・計画を立てる。

（2）活動①「地域の方へのインタビュー」

インタビューの目的にあった場所を決めて，質問を考える。

インタビューをする。（6か所）

（3）インタビューをもとに，活動計画を見直す

（4）活動②「土嚢づくり」

（5）活動③「防災グッズを考える」　④「防災・減災ポスター」　⑤「防災マップ」※同時期に実施

④：各自がインタビューをもとにポスターのテーマを決めて，ポスターを描く。

地域のどこに掲示するか決めて，依頼原稿を書き，電話で了解を取る。

ポスターと「防災グッズチェック表」を持参する。（校区内10か所）

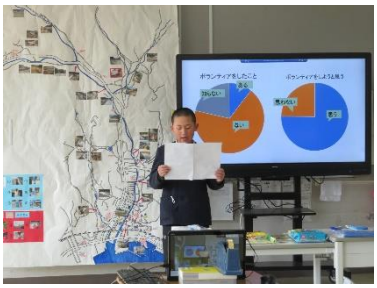
校内各所にポスターの写真を掲示する。

⑤：防災マップを作る

地域の防災パトロールをする。

防災マップに書き込む。

防災マップを見て気づいたことをまとめる。



（7）発表①「2月参観日」　②「校内オンライン朝会」

①：各自が活動を基にテーマを決めて発表原稿を書く。

発表に使う資料を選んでパワーポイントにまとめる。

発表する。

②：全校児童にアンケートを実施し，その結果を基に参観日の発表内容に加筆修正を加える。

（8）学習のまとめ

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・自然災害や防災・減災を知識レベルで終わらせるのではなく，自ら活動の主体となることをめざして学習活動に取り組んだ。調べたことを新聞等にまとめて報告することに重きを置く活動から，子供たち自らが地域に出かけて地域の被害の実態を調べたり，地域の方々に働きかけたりする活動に方向転換した。

・防災グッズを購入し，実物を見たり手に取ったりできたことで，防災グッズチェック表の作成だけでなく地域へ配布することを提案するなど，活動意欲が高まった。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・それぞれの活動においても，常に防災・減災教育の大きな目標を確認するとともに，その活動ごとの目的を意識しながら進めることで，意欲的に活動することができ，その後の活動につながっていった。

・「防災ファイル」に，学習活動を綴じていくことで，次の活動のヒントとなると同時に，活動に対する達成感を持たせることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・防災・減災のためにどのような活動をすることが大切か，自然災害が起きたときにどのような行動をすることが大切かということなど曖昧であったことが，より具体的な行動をイメージできるようになった。

・地域でインタビューをしたことで，自然災害の恐ろしさと，そこに立ち向かった人たちの力強さと人の温かさを実感し，インタビュー前は自信のなさや消極的な思考が目立った子供たちが，自分たちにできることがあるという確信をもって，積極的に活動をしていった。

・ボランティア活動や啓発活動など，子供の自分にも地域のためにできることがあることを自覚し，できることをしたいという強い気持ちを持つようになった。

・防災パトロールで，住んでいる地域にも消火栓や消火器，海抜表示，防潮堤用フラップゲートなど，災害から身を守るための備えが町のあちらこちらにあることを知り，地域以外の場所でも消火栓や消火器の設置などに興味を持ち，自主的に確認するようになった。

・消防団の方（保護者でもある）の話を聞いて，自分も地域のために活動したいという思いを持ち，「少年消防クラブ」に入会した児童が数名いた。

・他教科とのつながりを意識させたことで，他の教科の学習にも意欲的に取り組む姿が見られた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・本校の教職員のなかで，西日本豪雨の時にいた職員は３名しかおらず，報告会で使用するプレゼンテーションを使った校内研修を実施した。

・児童と一緒に活動したり，研修を受けたことで，私自身，減災・防災について SDGS の視点から見直したり，あらためて，私事として真剣に考えるきっかけになった。

・4 年生のほとんどの家庭で，「避難場所」「避難経路」について話し合ったり，「防災グッズ」を準備したりするなど，子供たちと一緒に減災・防災に備えて活動してくださった。

・子供たちがインタビューを希望した社会福祉協議会では，子供たちによく分かるように，西日本豪雨災害直後の被災した町の動画や，その後の実際のボランティア活動を紹介したプレゼン，資料などを作成してくださっていた。また，社会福祉協議会のＨＰで子供たちがインタビューをした様子を紹介してくださった。

・安芸津支所では，避難所用の簡易ベッドや非常食を用意してくださり，実際に体験したり手に取ったりさせていただいた。また，インインタビュー後には学習の参考になればと西日本豪雨直後の写真等の資料を送ってくださるなど，積極的に協力してくださった。

・子供たちがよく利用する商店では，ポスターと一緒に置いてもらった「防災チェックシート」を，積極的に来客に配布してくださっている。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・児童が活動の主体になれるようにじっくり取り組んだ。まずは自分たちで活動の目的を考え，計画を立て，準備をし，活動した。活動後には，自分たちがあらかじめ立てた計画を見直し，次の活動へとつなげていった。そのために，児童から「〇〇をしたい。」という提案が出やすいように環境を整えたり，生活場面でも防災・減災につながるような声掛けをしたりした。

・インタビューやポスター配布，防災パトロールなど，地域に出ていく活動を多く取り入れた。

・社会科や国語科，理科など学習の際に，この学習が防災・減災活動とどのように結びつくかを具体的に説明しながら授業をすすめた。

・学級通信で月に１度程度，活動報告を紹介した。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・地域の中の教材となり得るものを事前に調査して整理しておく。

・被災の実態が分かるようなものを収集，整理し，学校の財産として蓄積しておく。

・得たい情報を考えてインタビュー先を決めたが，インタビューをする順序も考慮する必要があった。

・学校として防災・減災教育全体計画や避難訓練を見直す必要があることを痛感した。現在は火災や地震・津波を想定したものであり，河川の氾濫や土砂災害等，西日本豪雨災害の教訓を生かすものがなく，新たに作る必要があると感じた。

・地域の防災・減災ネットワークのようなものに子供たちが位置づいていくような，長期的な展望を持った取り組みにしていく。

・今年度予定していた地域との合同避難訓練がコロナ禍で中止となってしまった。来年度は是非実施したい。

・今年度は，４学年中心の活動であったが，他学年にも広げていきたい。

７）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

学校名	9. 大牟田市立みなと小学校
担当教員名	下地　徹

活動のテーマ	自助、共助の力を身に付ける減災教育プログラム
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	（　6　学年　260 人）（複数可）
活動に携わった教員数	25　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	10　人　【保護者・地域住民・その他（ 九州朝日放送 気象予報士 ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2020 年　9月　14 日　～　西暦 2021 年　3月　12 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震 ・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（　　）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

○　「自助、共助」の視点から、豪雨等による災害発生時における適切な判断力や行動力を身に付けさせる。

○　地域全体で減災に取り組むことのできるネットワークを構築する。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

ア　実践内容

ｱ）第５学年における防災・減災学習（25 時間 総合的な学習の時間）

先行実践として、５年生が防災・減災学習に取り組んだ。令和２年７月豪雨発生当時の大牟田市防災対策室、地域消防団、地区公民館の方々の対応から自助、共助の大切さを学び、「自分たちにできる自助、共助」として、災害対応マニュアルや地域防災マップづくりに取り組んだ。

ｲ）気象予報士、防災士と学ぶ防災学習（2 時間 総合的な学習の時間）

気象予報士と防災士を講師として招き、学習会を行った。

気象予報士からは、海洋温暖化と豪雨の関係について学び、生活の中で自分たちにできることを考えた。また、防災士からは、豪雨発生時の対応方法について学び、防災バッグの中身の検討を行った。

ｳ）避難・集団下校訓練（2 時間 学校行事）

豪雨を想定し、全学年を地域ごとにグループに分け、緊急避難、緊急下校の訓練等を実施した。

実施ごとに職員全体で活動をフィードバックし、課題を洗い出して、次回の訓練で改善するように PDCA サイクルで取り組んだ。

イ　実践の流れ

月	第５学年における実践	学校全体での取組・職員研修・その他
８月	・防災、減災学習に関するカリキュラム作成	・全職員での共通理解
９月	・５年生による先行実践開始 ①　防災対策室、消防団、公民館へのヒアリング	・気象予報士との連絡調整 ・学校区避難経路の見直し
10 月	②　豪雨の原因調査（海洋温暖化）	・地域テレビ局との学習計画づくり
11 月	③　校区浸水状況調査（フィールドワーク） 調査内容のまとめ	・学校区避難経路の修正 ・避難訓練、集団下校訓練の立案
12 月	④　途中経過報告会の実施	・避難訓練等の提案、共通理解
１月	⑤　災害対応マニュアル、防災マップ作成	・第１回避難訓練等の実施
２月（予定）	⑥　マニュアル、マップの配付、広報	・気象予報士との減災学習実施
３月（予定）		・第２回避難訓練等の実施

3）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

○　及川先生の講演の中の「持続可能なプロセスとしての ESD」を基に、step4 までを意識したカリキュラムとなるよう

に、実践内容を改善した。

○　助成金を受け、地域の詳細な地図データを活用することができ、危険箇所や高低を調査するための資料とすることができた。

4）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

○　先行実践として第５学年におけるカリキュラムを開発することができた。

○　避難経路や避難訓練を見直し、実際の災害時を想定した内容に改善することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

○　浸水被害発生時の具体的な対応を知り、自助するための備えや行動手順を想定することができた。

○　災害に対する関心が高まり、防災、減災に関する自主学習に取り組む児童が増えた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

○　実践に地域や関係機関を取り込んだことにより、協働して対応する意識を高めることができた。

○　避難経路等を見直すきっかけとなり、具体的な被害状況を想定した訓練を実施することができた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

実際に被災した経験をすぐに実践に生かしたことから、危機感をもった学習展開とすることができた。
また、地域等の関係機関の課題が分かり、共助の視点として実践に取り入れることができた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

○　子どもたちの資質能力を高めるとともに、教職員の対応力や判断力を高めていく必要がある。

→次年度は職員研修会の充実と、災害発生時に円滑に機能する組織体系を構築する。

○　第５学年の先行実践により、正常性バイアスを疑うことの大切さを明確にすることができた。

→次年度は、他学年におけるカリキュラムを開発していきたい。

7）その他（※特にあれば記述）

※別途、補足資料などがある場合は、添付してください。　　（添付資料の　　有　・　無）

学校名	10. 大牟田市立白川小学校
担当教員名	濱口一昭

活動のテーマ	学校と地域がつながる防災・減災教育
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間、社会科　）
活動に参加した児童生徒数	（　第１～第６学年　　３３５人）（複数可）
活動に携わった教員数	１９　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	＿＿＿＿＿＿人　【保護者・地域住民・その他（　　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　２０２０年　９月　１日　　～　　西暦　２０２１年　１月　２０日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

豪雨災害や地震災害について知り、災害時の避難行動や避難生活に向けたに日頃からの備えについて学ぶようにし、自分の命を守ることとともに、地域との関わりをより一層深め、地域とともに減災・防災への意識を高めることができるようにする。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

豪雨災害と地震災害を想定した減災・防災教育に取り組んだ。

	４年	５年	６年	全校児童
９月	「大牟田市や日本の災害の歴史を知ろう」		○「高齢者宅にポスターを届けよう」	
１０月	○防災グッズを知ろう	○防災グッズを知ろう	○防災グッズを知ろう	
１１月	○「防災ダ・ズ・ン」ゲーム（仙台市宮城野区の五輪町内会防災ゲーム研究会 2015） ○「校区防災マップをつくろう」 ○「防災カルテット」（公益財団法人市民防災研究所）	○「防災カルテット」（公益財団法人市民防災研究所） ○「備蓄品を確認しよう」	○「防災カルテット」（公益財団法人市民防災研究所） ○「修学旅行での学習を生かして地震災害への対策を考えよう」	○避難訓練（地震火災）
１２月	○「図上訓練をしよう」	○「災害時の行動のしかたを新聞やポスターにして広げよう」	○下級生への発表	○避難訓練（豪雨）
１月		○校内ポスター掲示 ○保護者や地域の方へ新聞を配布		
２月	地域の防災訓練に参加（※中止）			

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

９月の研修会で、減災・防災教育を継続して進めていくためには無理のないカリキュラムの作成が重要であると感じた。そこで、４学年以上の学習を進めるに当たって研修会時の配布されていた防災学習シートを活用しながらカリキュラムを作成した。活動の中で、消防署や市の防災対策室の方の指導助言を受けながら、各学年の学習活動の充実を図った。これ

により、昨年度まで全校児童で行っていた地震・火災・不審者対策の避難訓練に加え、新たに「豪雨」の設定でも行うことができた。豪雨対策の避難訓練で、７月に受けた災害の教訓として再度、命を守ることの大切さを実感することができた。さらに、地域の方々と一緒になって学習活動を行うことができたことで、地域の危険個所等の共通理解ができ、さらにつながりを深めることができた。そうした学習の中で減災・防災への意識を高めるために使用した防災グッズや消耗品などに助成金を有効活動することができた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

４・５・６年生を対象にそれぞれの学年に合わせて具体的な活動を位置付けたカリキュラムを作ることができた。４年生では、豪雨災害の経験から、水害で危険性のある場所を地域の方々と一緒に探し、校区の防災マップの制作活動、５年生では、４年生が作った防災マップと６年生が修学旅行で調べた地震時の避難についてのプレゼンを活用して、防災新聞・ポスターを作成し、保護者や地域の方への啓発活動、６年生では、７月の災害後、地域の独り暮らしの高齢者に向けて水害時の避難の仕方を書いた冊子やポスターの配布と修学旅行で学習した地震災害について下級生へのプレゼン活動などを位置付けた。これにより、児童が目的をもって調べたり表現したりして、主体的に学ぶカリキュラムをつくることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

災害の経験から、校区の特徴を減災・防災教育としての視点で学習を進めたことで、児童の意識の高まりと災害時にどのようにして避難した方がよいのか、備えておいた方がよいものは何かを考えて自分なりに判断することができるようになった。例えば、また同じような豪雨災害が起こったときは高い所に避難すること、どこが避難場所として適切か知っておくこと、災害時に必要なものを家族と話し合っておくこと等、個人としての避難の仕方や事前の準備等、学校での学びを家庭で生かす行動も見られた。

また、豪雨災害を想定した避難訓練を行ったことで、水位の状況によっては学校の外へ逃げてはいけないことや地震・火災の訓練と同じように協力や助け合いの大切さを体感することができた。

これらのことから、これからも予測不可能な出来事が必ずあるという考えのもと、物事を多面的・多角的に考える力や学校の仲間や地域の方と協力して命をつないでいく力を身につけることができたと考える。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

教師は、カリキュラムとして学習内容をきちんと位置付けたことで学習の流れを把握でき、実践意欲の向上につながった。さらに、児童の様子から実践に手応えを感じ減災・防災への意識が高まった。

保護者については、今年は新型コロナウイルス感染の影響から参観として学習を見ていただくことはできなかったが、児童が学校で行った実践を家庭に広げたことで、家族で災害に備えるために必要な防災グッズ等の話合いや、避難する場所を共通理解する話合いをしたという家庭が多かった。

地域の方については、４年生と一緒につくった防災マップのおかげで「より危険個所を意識するようになった。」、５年生が配布した新聞のおかげで「万が一の時に備えて準備するようになった。」、豪雨災害後に６年生が独り暮らしの高齢者宅に配布した防災対策の冊子やポスターのおかげで、その後に来た「台風で役に立った。」等、学校の取組を評価していただいた。

関係機関としては、消防士の方と大牟田市防災対策室からの大きな支援とご協力をいただいたおかげで、自然災害の怖さを再認識し、より専門的に減災・防災に対する心と物の備えの大切さを学ぶことができた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

４年生においては、防災マップを使って地域の方と一緒に図上訓練を行い、実際の災害を想定した避難場所探しや行動の仕方等を交流した。５年生においては、自分たちがつくった減災・防災新聞を保護者や地域の方へも配布し、啓発活動を行った。６年生においては、本校が以前から取り組んでいるジュニア民生委員・児童委員活動との連携や、理科学習、熊本への修学旅行とのつながりを重視し、それぞれの教育効果を高めた。ジュニア民生委員・児童委員活動によって、相手に伝えるという目的意識が生まれ、伝えるために理科や修学旅行を通して意欲的に知識を獲得するといった高まりが見られた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

本年度の実践は、実際の経験から、いつ起こるかわからない災害を想定して、災害時の行動の仕方や事前の備えの必要性等を児童が自ら考え、判断できるようにしながら地域の方とのつながりを深めるものであった。これも、消防士や防災対策室の方の指導助言をいただきながらつくったカリキュラムによるものである。このカリキュラムを次年度以降に引き継ぐために各学年で実践を整理する必要がある。そして、地域とのつながりをさらに深めるために、学校の取組を保護者や地域に発信していくことも必要である。

※別途、補足資料などがある場合は、添付してください。

４年生「校区防災マップ」

４年生「図上訓練」

５年生「防災新聞・ポスターづくり」

５年生「防災ポスター」

５年生「防災新聞」

６年生「高齢者宅へ減災・防災冊子の配布」

６年生「下学年へのプレゼン」

全校児童「豪雨災害を想定した避難訓練」

学校名	11. 箕面こどもの森学園
担当教員名	守安あゆみ

活動のテーマ	「72 時間サバイバル～どう生きる？どう支える？」
主な教科領域等	教科領域（　　テーマ学習（総合的な学習の時間）　　）
活動に参加した児童生徒数	（　1～6学年　　42　人）（複数可）
活動に携わった教員数	6人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	70人　【保護者・地域住民・その他（　　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021 年　1 月 19 日　　～　　西暦 2021 年 3 月 4 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震 ・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（　　）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

今回は大地震が起きた時、被災直後に絞って学習することにしました。
被災直後の 72 時間にどんな状況が想定されるか、それに対しどのように対処すれば助かるのかを学びます。
まずは自分自身の身を守ること、そして次に周りの人を助け支えることについて、自分たちの日常生活の場面で起きた地震を想定して取り組みます。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

学習日	低学年	高学年	
1/19	＜オリエンテーション＞ 南海トラフを想定した動画を見て、これから学ぶことを知る。	＜オリエンテーション＞ ・地震大国日本に住んでいることを知り、もし自分だけや子どもだけの時に地震が起きたらどうすればいいだろうかという問いを持つ。 ＜環境チェックとローリング＞ ・校内の防災環境のチェック	学びに火をつける
1/21	＜環境チェック・防災バッグ＞ ・校内の防災環境チェックと防災バッグの中身確認	・備蓄品、防災バッグのチェック ＜サバイバルマニュアル作り＞ ・「登下校中」「留守番中」「その他自分 1 人の時」の３グループに別れて学習を進める。	知る 調べる 体験する 感じる
1/26	人と防災未来センター（神戸）見学と 阪神淡路大震災を体験された語り部の方のお話		
1/28	人と未来防災センターのふりかえり	・人と防災未来センターのふりかえり ・どんな状況が想定されるか、そうなった時どう対処すればいいか、日頃備えておくことは何かについて調べ、考える。	
2/2	72 時間サバイバル協会の講師によるお話		
2/4	＜身の守り方〉 学校にいる時、家にいる時に揺れたらどうやって身を守るかを知り、地震を想定して練習する	＜被災時の心理について学ぶ＞ ・自身も熊本地震の体験があり、東北で被災した子どもたちの学習支援を経験した卒業生に講師として来てもらい、被災時の心理についてワークショップ形式で学ぶ。	
2/9	〈身の守り方 2〉	＜サバイバルマニュアル作り＞	まとめる

	通学路、町、のりものでゆれたらどうやって身を守るかを知り、屋外に出て練習する。 〈地震直後にすることについて知る〉	・「登下校中」「留守番中」「その他自分 1 人の時」の３グループに分かれて進める。一人ひとりの実際の生活を想定した、使えるマニュアル作りをめざす。	
2/16	〈防災マップづくり〉 通学路に分かれて、実際に歩き、危ないところをメモする（最寄り駅、バス停から学校）	〈マニュアル作りの続き〉	
2/18	〈防災マップづくり〉 前のメモを参考に清書をする。	〈発表準備〉	
2/25	学習発表会（高学年が発表、低学年は聞く） 学びの発表。保護者にはオンラインで配信。		学びをシェアする
3/2	学びのふりかえり、サバイバルマニュアル冊子配布		ふりかえる
3/4		備蓄品、防災バッグのローリング（補充）	

各家庭でも、親子で防災をテーマに話し合ってもらいました。

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

〈9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと〉
・子どもが自分１人だけ、または子どもだけの時に被災した場合を想定した学びになったこと。自分で考え判断できることを目標にできた。

〈研修会を受けての自校の活動の変更・改善点〉
・被災直後の保護者への引き渡し方法について、再検討したこと。

〈昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点〉
・高額な謝礼金の外部講師も視野に入れて検討できるようになった。
・備蓄品購入の負担が軽くなった。
・ウエブカメラ購入により、コロナ禍の中でも保護者の方たちに子どもたちの学びの発表会を共有できた。

〈助成金の活用で可能になったこと〉
・備蓄品を必要数揃えることができた。
・校外学習に貸切バスを使うことができるようになった。（コロナ禍の中、公共交通機関を使わずに済んだ）
・ウエブカメラを使うことで保護者の方に子どものようすが伝わりやすくなった。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

・例年は、災害や防災に関する幅広い知識を学んだり体験したりしていたが、今回は災害直後の対処について、子どもだけの時に被災したらどうするかに絞って学習した。実際に子どもたちの日常生活のワンシーンで災害が起きた場合を想定したリアルな場面設定をすることで、子どもたちにとってより自分ごととなり、実践的な学びとなった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

〈低学年〉
・災害発生時の身の守り方について、屋内の場合、屋外の場合で実際にどのようにすればよいかを知り、体験することができた。休み時間に「地震が来たごっこ」をする姿が見られた。
・本校では遠方から公共交通機関で通学する児童が多いので、低学年全員でできることとして、最寄駅やバス停から学校までの道のりの防災マップをグループで作った。毎日通る道に消火栓や防火水槽、避難所案内板があるのを見つけたり、公園の入口の高い壁が崩れたり電柱が倒れたりするかもしれないことや、１mほどの段差のある高い位置に駐車場があって地震が起きたら車が滑り落ちてくるかもしれないことを発見したりして、普段から道を歩く時に周りに気をつけるようになった。

〈高学年〉
・通学路で被災した場合の対処方法について、一人ひとりが自分の通学路で起こりうる場面を想像して調べ、考えたことで、被災直後の対応を知ったり、日頃から備えておく必要性を感じたりできた。おうちの人と家族間の連絡の取り方、集合場所などについて話し合いをすることができた。
・留守番中に被災した場合の対処方法について、おうちの備蓄品を確認したり、避難経路を確認したり、おうちの人と備蓄品のことや避難場所について話し合いをすることができた。
・愛犬と散歩中に被災した場合のペットのための防災について調べてまとめたり、公園で遊んでいる時に被災した場合の怪我の度合いによってどう対処すればいいか、どんな備えをしておけばいいか考えてまとめたりした。
・被災時はパニックになることを知り、心を落ち着かせる方法を考えたり知ったりすることができた。
・学校の備蓄品や防災バッグの中身を確認し、ローリングをすることで、学校の防災バッグなども自分ごととして感じることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から
・保護者の方は子どもが学校でどんなことを学んでいることを知り、実際におうちでどのような対策をとるかについて子どもと一緒に話し合っていただいた。防災バッグを準備したり、備蓄品を子どもと一緒に確認したり、通学中に被災した場合にどのように連絡を取り合うのかについて話し合っていただいた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・今回はやはり、子どもだけのときに被災した場合に絞って取り組んだことがよかった。子どもたち一人ひとりの「自分の身は自分で守るんだ」という意識が高まった。また、個人の学びを小学部全体にシェアすることで、他の人が取り組んだ視点や知識を全体で持つことができた。友だちの発表を聞いて、自分の知識として生かそうとする声が多く見られた。
・学校の防災バッグや備蓄品のローリングを子どもたちで行うことで、より自分ごととなった。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望
・今回は自助の要素が強くなってしまったので、今後は共助、N助の学びも深めていきたい。
資料リンク
https://1drv.ms/u/s!AmmFNIizALRjgat9XLWkhGstoHebfA?e=fIODPM
資料内容：活動写真、防災マップ（成果物）、サバイバルマニュアル(成果物)など

学校名	12. 気仙沼市立鹿折中学校
担当教員名	小野寺　紀子

活動のテーマ	震災伝承学習，聞く・学ぶ・伝承する～未来の命を守る「あの日の鹿折の伝え手として」～
主な教科領域等	教科領域（　　総合的な学習の時間　　）
活動に参加した児童生徒数	（　　全　　学年　１０４　人）（複数可）
活動に携わった教員数	１５　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	約 150 人【保護者・地域住民・その他（大学准教授１, 院生・学生 2, 伝承館館長, 公民館）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　2020　年　7　月　10　日　　～　　西暦　2021　年　　3　月　24　日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本校が位置する宮城県気仙沼市鹿折地区は，東日本大震災において津波・火災により壊滅的な被害を受けた地域である。震災から約 10 年が経ち，震災を知らない世代の入学や震災の記憶の風化が危惧される現状をふまえ，今年度より新たな防災学習を展開した。本学区は震災の被害が大きかった地域であり，地形的にも今後も津波の被害が危惧されている地域である。3・11 の事実を学び，教訓として何を伝承すべきかを考えさせるとともに，防災・減災意識の高揚と地域の一員として，主体的に防災・減災に向けた行動をとることができる生徒の育成を目指す。体験的・探究的な学習を通して生命の重さや尊さについて考えさせ，防災・減災への正しい理解と必要な能力や資質の向上を図り，よりよい未来を創造し，地域に貢献しようとする主体的な態度を育む。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

(1)　震災の記憶の風化を防ぎ，震災の教訓を語り継ぐ震災伝承学習（探究的な学習）への取組

震災により甚大な被害を受けた鹿折地区の当時の状況を知り，生命の大切さや防災・減災への正しい理解と必要な能力や資質の向上を図るため，地域の被災者からインタビュー形式での調査協力をいただき，避難行動の可視化を通して教訓や気付き，学びを伝承する学習に取り組んだ。（活動の経過と時数は右表参照）学習全体を通して，「聞く」「学ぶ」「共有する」という視点を大切に学習を進めた。発表会は調査協力者や保護者の方々を前にポスターセッション形式で行った。

また，震災伝承学習の一環として，６月に３年生，３月に２年生が気仙沼市震災遺構・伝承館での研修をそれぞれ行った。

時数	防災（震災伝承）学習・活動の経過
0	今年度の防災学習について （ガイダンス）
2 ～ 4	震災を知る学習（1 年生） 救急救命講習（2 年生） 震災遺構・伝承館研修①（3 年生）
2 1 2	・聞き取り調査等のレクチャー ・顔合わせ，役割分担 ・模擬練習（教師）・振り返り
3	避難行動詳細調査（インタビュー） （対象：地域住民１１名）
8	・調査内容の振り返り，整理 ・探究テーマの設定 ・活動計画の立案 ・課題の追究，考察 ・発表・発信方法の検討 ・課題追究，発表準備
2	中間発表・振り返り
2	発表準備，グループリハーサル
3	全体リハーサル，準備
2	防災学習発表会（参観日）
1	振り返り，活動のまとめ
3	震災遺構・伝承館研修②（2 年生）

(2)　避難所初期設営訓練の実施とマニュアルの作成（体験的な学習）への取組

気仙沼市総合防災訓練日において，コロナ禍対応の避難所初期設営訓練を実施した。地域の一員として中学生ができること，防災･減災に主体的に関わろうとする意欲と実践力の向上を目指した。事前に明確な目標【①教師不在でも生徒中心で設営できる力を身に付ける，②設営完了 20 分以内，③避難所初期設営マニュアルの作成】を設定した。訓練後は活動を振り返り，課題を検討し，避難所初期設営マニュアルにまとめた。

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修会での各校の実践例や実践発表する生徒の姿を拝見し，災害時のみならず社会や様々な場面において正しい判断と行動力で対応できるしなやかな力や生徒達の総合的な力を育むことができる学習活動の必要性をより強く実感した。そこで，防災学習計画を再度見直し，ストーリー性のある学習展開の工夫や発信方法の在り方，生徒同士の縦のつながりや連携を意識した活動計画の見直しを行った。また，地域や小学校との連携の在り方について模索した。

助成金を頂いたことで，震災遺構・伝承館への研修や防災学習アドバイザーとして東北大学佐藤翔輔准教授を招聘し，指導，助言を頂きながら学習を進めることが可能となった。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・東日本大震災についての知識や震災の事実や教訓を語り継ぐことの大切さを理解すると共に，命の大切さや自他を尊重する態度が高まった。
・課題を自分事としてとらえ，自分のすべき事やできることを考え行動に移すなど，主体的に課題を追究する姿勢や力が高まった。
・地域や社会参画への意識と社会貢献への意欲の向上が見られた。（上位の学年ほどその意識が高い）

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・社会や地域の課題をより自分事ととらえて学習に取り組む様子が多く見られ，学習後の振り返りの感想からも，地域貢献や自己有用感の高まりが感じられた。
・得た知識や資料を基に情報を整理し，自分の考えや思いを分かりやすく発信する力や，仲間と協働して取り組む中でコミュニケーション能力の向上が見られた。
・異学年縦割りの活動としたことで，自ずと上の学年がリーダーシップを発揮したり，下の学年の新しい着想がよりよいものを生み出すきっかけとなっていたりするなど，共に学び合い，自ずとそれぞれの得意分野を生かした役割分担や取組が生まれた。主体的に課題を追究する姿勢につながっているものと考える。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・情報提供者の選定では地域の関係機関からも協力を頂いた。連絡調整をはじめ，平素から顔の見える関係づくり，新たなネットワークづくりの構築を目指した。総合防災訓練当日は避難，設営訓練の様子から振り返りまでの活動の様子を，多くの地域の自治会（PTA 含む）やまちづくり協議会の方々に参観していただくとともに，生徒の取組について全体の場で講評をいただき，その後の活動に生かした。
・防災に関する校外研修や大学，地域との連携は，生徒だけでなく教員にとっても新たな防災・減災学習の指導方法や教育効果を学ぶ貴重な機会となり，教育効果が高まった。

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

・コロナ禍における避難行動や避難所開設などの喫緊の課題や地域人材を活用した学習課題の設定。

・近隣の小学校への震災伝承の学びの発信・共有による防災・減災意識の啓発。（５・６年対象）

・全校生徒による簡易防護服づくりへの参加。ボランティア団体の方々を講師に迎え，これまで約６００着完成。東京の医療機関や気仙沼市などに寄贈，学校でも備蓄している。

・震災発生から１０年となる令和３年３月１０日に実施した震災遺構・伝承館での研修では，語り部として活動している気仙沼市立階上中学校３年生から館内をガイドしてもらい，その後，意見交換を行うなど「震災伝承」という視点においてさらに学びを深めた。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

今年度，新たな防災学習を展開し，生徒だけでなく教員にとっても大きな学びがあった１年であった。防災学習を通して，地域とのつながりや新たな絆を築くとともに，地域と学校が連携しながら地域におけるよりよい防災の在り方を考える契機となった。「生徒の生命・安全を守る」ことは，学校教育の基礎であり，責務である。被災地にある学校として，震災伝承学習や体験学習が，防災教育についての実感の伴った理解につながるとともに，未来を生き抜く力を育む学習であることを実感している。また，日頃から学校と家庭，地域が良好な関係を保持し，安全に関する情報を共有することが，生徒等の命や安全を確保することにつながることから，今後も情報共有の場，普段からの関係づくりを大切にし，共に活動する場の工夫していきたい。今年度の取組を振り返り，課題を整理し次年度への計画を立案，生徒の更なる成長を促していきたい。

【次年度の課題】

・年間指導計画の内容の見直し（活動の系統性や関連性の整理及び指導体制・組織の見直し）

・生徒会活動や防災学習における生徒主体の ESD 活動の推進。

・地域や小中，他校と連携した交流，学習活動の工夫

7）その他

・生徒の防災意識高揚の一環として，鹿折中防災イメージキャラクターを生徒から公募。
防災ポスターや，各種資料やお便りなどで掲載・活用している。

〔↑簡易防護服づくりへの参加〕

〔市総合防災訓練参加：↑スクールバス合同訓練，

↑避難所設営訓練後の振り返り（委員会毎）〕

〔↑震災遺構伝承館研修〕

〔震災伝承学習：↑発表会の様子〕

〔震災伝承学習：↑小学校訪問〕

学校名	13. 福島県南会津郡只見町立只見中学校
担当教員名	万﨑　公彦　　渡部　兼介

活動のテーマ	地域合同防災訓練における生徒の関わりについて
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	（　２　学年　４１　人）（複数可）
活動に携わった教員数	３　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	０　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦２０２０年１１月　１日　～　西暦２０２２年　３月３１日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震 ・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

平成２３年、只見町は新潟・福島豪雨災害により甚大な被害を受けた。この経験から、地域の方々や関係機関と連携した地域合同防災訓練を実施している。訓練を通して、自助・共助・公助の意識は高まっているが、防災・減災の視点から豪雨災害が起こった原因、土砂災害から人間の生命・財産・生活を防御するための治水、豪雪による雪害についての調べ学習を充実させたい。そのためダムや資料館等に出かけ生きた学習をさせたい。

また、只見町を愛し災害の歴史や教訓を後世に語り継ぐ人材を育成するためにも、今まで地域と学校が計画してきた地域合同防災訓練について、生徒がアイディアを出し、計画を立案し運営に主体的に参加することを目的としている。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

・令和２年１２月４日（金）、東北電力奥会津水力館を訪問し、災害を知るための調べ学習を行った。
・実際にダムを間近で見学することはできなかったが、金山町の本名ダムを見学し、ダムの仕組みについて学習した。
・３学期以降、総合的な学習の時間を活用して、地域合同防災訓練に向けて細かい日程を考えていく。
・令和２年１２月１０日（木）、福島県立博物館の学芸員をお招きし、防災・減災についての講演会を行った。自助・共助・公助についての意識がさらに高まった。
・今後、２月から地域合同防災訓練に向けた話し合いを進めていく予定であったが、次年度の４月よりスタートする予定であり、令和３年７月８日に行われる地域合同防災訓練に備える予定である。。

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・自助・共助・公助の中の特に自助・共助についての意識が高まった。
・実際に聞き取り調査やアンケート調査を行うことへの意識が高まった。
・校外への発信の仕方について、当時を知らない児童生徒のために語り部活動の重要性について考えることができた。また、治水の仕組みなどについて深く知ることができた。
・実際の訓練は７月に実施するが、助成金で購入したデジタルカメラやトランシーバーを活用しての具体的な構想を立てることができた。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

・自分たちで何かをしなければならないという気持ちが育ってきた。
・災害を風化させないという気持ちが育ってきた。特に災害を知らない世代に災害の恐ろしさを伝えたい（語り部として）という気持ちが高まった。

・地域合同防災訓練の実施の在り方を考えていく中で、改めてN助の必要性を感じることができた。地域や外部とのネットワークの可能性を考えていく上で大きな成果となった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。
・水の役割（治水の面）について、洪水などの災害が起こる可能性がある一方、豊かな恵みを与え、地域の発展に寄与しているという理解を深めることができた。
・当時の状況を知っている方々への聞き取り調査をもとに、災害の風化防止と正しい知識を発信しなければならないという探究的学習への意識が高まった。
③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から
・教師側でさまざまな関係機関と連絡を取り、授業参観で保護者と生徒対象に防災・減災の講演会を設定するなど、自助・公助・共助の重要性を確認することができた。
・学年週報の中で定期的に防災・減災について取り上げるようになった（洪水・地震等）。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点
・自分たちが計画を立案し地域合同防災訓練を実施することで、地域について考え、行動できる生徒が育成できるように工夫した。地域について考え、行動できる生徒が育成できる。話し合い活動を多く取り入れ、熟議を重ねる中で、本校の教育目標である「考える生徒」を育成することができる。
・自分たちの取組を地域に発信することで、情報処理能力や発信力を身につけることができる。
・本格的な話し合いはこれからとなるが、生徒主体で考え、実行するこの訓練が、自分の力で生まれた町を守っていくという気持ちにつながっていく。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望
・治水の面で、豊かな恵みを与え、地域の発展に寄与しているという理解を深めることができた。
・コロナ渦における新しい生活様式を意識して、アンケート調査や語り部としての活動が十分にできるかどうかを話し合っていく。
・防災マップの見直しと作成。

7）その他（※特にあれば記述）
・地域合同防災訓練に向けて、近隣の小学校との打ち合わせを重ねているところです。７月８日の実施に向けて地区の振興センターとの打ち合わせも予定しています。

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

学校名	14. 多摩市立多摩中学校
担当教員名	千葉　正法　　柏原　貴浩

活動のテーマ	ソーシャル・キャピタルで学びを止めない防災・減災教育の創造
主な教科領域等	道徳科・保健体育科・総合的な学習の時間・特別活動　等
活動に参加した児童生徒数	全（１・２・３）学年
活動に携わった教員数	３８人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	５５人　【保護者・地域住民・その他（　市役所・大学生　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。(複数可)
実践期間	西暦　　２０２０年　4月１日　～　２０２１年　3月２０日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

新型コロナウイルスにより本校では、「避難所運営ガイドライン」に沿った避難所としての新たな機能・運営が課題となっている。そこで生徒にはこれまでにないコロナ禍の影響を受けながらも、持続可能な防災・減災教育を開発的に推進することを目的とした。特に、中学生に求められる共助に視点を絞り活動をした。

まず、例年炊き出し訓練を行っている地域運営協働本部と連携し、新型コロナウイルスに対応した熱中症対策として本校の湧水の有効利用を考えミストシャワーとドリンクバーを実施した。

次に、減災教育講座として、災害時における風呂敷の活用法を学んだ。風呂敷は、家庭にある大きな布などでも代用でき、災害時の避難時や避難所で中学生が中心となって、家族や地域住民を助けられることを狙いとして実施し災害時に活用できるように考えた。また、ソーシャルディスタンスに配慮しながら実習できるように工夫した。

最後に、新型コロナウイルスを災害としても捉え、生徒会の発案で、学校内外の新型コロナウイルスの感染拡大と予防、医療従事者への感謝をこめた蓄電池と太陽光パネルの LED イルミネーションを設置・点灯した。また、こうした様々な教育活動継続的なものにしていくためにも記録を残し、年間を通して災害時の情報発信手段として Google classroom にて配信し、休校中や休校後も保護者・地域に配信を行っている。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

6 月～9 月　実践内容「熱中症予防対策ミストシャワー　放課後ドリンクバー」

これまで下水に流していた本校敷地内から湧き出る地下水を利用し、ソーラーポンプセットを活用してミストシャワーを設置した。また、生徒の下校時に地域運営協働本部が中心となり熱中症予防のドリンクバーも実施し、災害時における地下水の活用と地域と連携・協働する体制を学んだ。

10 月　実践内容「一斉下校訓練の実施」

「3. 11 を忘れない」「東京マイ・タイムライン」を活用し、実際の避難行動やそのための準備を検討する共に、一斉下校訓練を実施した。

11 月　実践内容「ドリームマップの作製」

地域や人の役に立ち自己実現を図るためにも自己の未来像や職業以外に社会貢献することを学んだ。

11 月　実践内容「防災・減災風呂敷講座」

事前学習で、「減災とは」、「自助、共助、公助」について学習し、中学生における共助について学びを深め、講座当日を迎えた。

風呂敷講座当日の前半に風呂敷に関する基礎知識を指導し、後半は、防災や減災時にはどのように活用していくのか実践を行い、風呂敷をどのように活用できるか学んだ。また、東京都都知事である小池百合子さんが紹介していた「防災風呂敷」についても」ご紹介いただき、実際に手に取って活用方法を知ることができた。

12 月　実践内容「新型コロナウイルス感染拡大予防、医療従事者への感謝のイルミネーション」

生徒会を中心として、再生エネルギーを活用し、新型コロナウイルスの感染拡大と予防や医療従事者への感謝を込めた LED イルミネーションを設置した。

2～3月　実践内容「市防災課、市議会議員などに対して、これまでの活動実践を報告する（予定）」
地域とのクロスロード、HUGなど計画したが、新型コロナウイルスにより地域と実施が中止になった。

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

減災教育の充実には、単発的な学習活動だけでなく継続的かつ実践的な教育活動の実践が必要であると考え、災害時における行動について見直しを図り、助成金を活用して講師を招へいし、風呂敷や家庭にある大きな布を活用して、避難所での生活や災害発生時の活用の仕方について学ぶことができた。また、その様子をGoogle Classroomにて保護者、地域に伝えた。

他にも、高圧ポンプやソーラーポンプやケーブルを購入し、ミストシャワーやイルミネーションなどを購入することができた。また、こうした教育活動を記録し、さらに改善を図っていくためにもICT機器を購入することができた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

生徒自身が自らの防災意識を見直すことができ、災害時における共助の具体的な方法を学ぶことができた。本校において防災教育は昨年度まで行われていたが、新たに減災という観点から本校の教育活動を見直すことができた。新型コロナウイルスの影響もあり実施の難しいこともあったが、校内体制や地域との連携など様々な角度から、本校の減災・防災教育を見直すことができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

ミストシャワーや放課後ドリンクバーの活動を地域運営協働本部の方々が中心となることで、自分たちは様々な人に支えられて生きていると感じ、地域社会の一員としての意識をもつことができた。そうした意識をもち、災害が起きた時には、今度は自分たちが顔見知りとなった地域の方々に共助ができるように身近にある風呂敷や家庭にある大きな布を活用できることを知ることができた。(つながりを尊重する態度、他者と協力する態度)。生徒は、災害時に避難所で中学生に期待される事は大きいことは理解することができていたが、実際にどのような行動し、周りの人を助けることができるか主体的に考えることができた（多面的、総合的に考える力、責任を重んじる態度)。生徒は、災害が起きる前の考えはもっていることが多かったが、災害の被害を減らすことや災害が起きた後の事を考える良い機会になった。

また、身近な問題となっている新型コロナウイルスの深刻さを考え、防災と感染症予防について考えるとともに、最前線で自分たちの代わりに戦っている医療従事者への感謝と、自分たちには何ができるかを考える機会になった（批判的に思考、判断する力、粘り強く実践する力)。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

今回の実践を通して、地域のソーシャル・キャピタルを見直す機会にもなった。ミストシャワーでは、地域運営協働本部が中心となることで学校と地域が一体となる活動となった。風呂敷講座は、学校がコミュニティースクールとして機能しながら、災害時の対応力や防災・減災の機能を向上させ、地域のソーシャル・キャピタルを高める機会にしようとしたが、新型コロナウイルスの影響もあり、保護者、地域の方々をお招きしてのHUGなどは実現できなかったもののコロナ禍での持続可能な防災・減災について学習することができた。

また、風呂敷が防災に使えることを知らないことが多かった教員側が、実際に活用できる方法を知ったことで継続的に学校教育全体を使って指導できるようになった。その成果として、総合的な学習の時間や特別支援学級の自立活動の授業でも指導をすることができた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

どの実践においても、コミュニティスクールの役割を果たしつつ、地域のソーシャル・キャピタルを高められる教育活動を実践した。新型コロナウイルスの影響を考慮しながらも、学校と地域が一体となって、活動できるようにソーシャルディスタンスを意識し、3密を回避しながら教育活動を実践してきた。特に、ミストシャワーと同時に行っていたドリンクバーでは、地域の方々と生徒が身近に触れ合える機会となった。

また、風呂敷講座では、風呂敷以外の布（バンダナ・ハンカチ）でも実践を行い生徒の身近なものを使うことで風呂敷がなくても、様々なものを使って防災・減災に活用できることがわかった。小池百合子都知事が推奨している「防災風呂敷」についても活用の仕方、紹介を行った。実際に包んでいるものを生徒や教員が手に取り、体験する活動も行ったこと

で、より身近に感じる活動になった。
　そして、イルミネーションは設置場所をより多くの地域の方々見れるように多摩川側の方に見えるように設置し、本校向かい側の病院にも見えるように工夫をした。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望
　新型コロナウイルスの影響も考慮に入れながら、地域の方々と協働して防災・減災教育を継続的に行っていくことが重要である。避難訓練の中に地域運営協働本部と協力をしたものを入れていくなど様々な場面で地域の方々との協働が必要不可欠になってくる。
　今回の実践の一つである風呂敷講座で、風呂敷や大きな布は一つで、物を包んだり、ヘルメットになったり、様々な活用ができることを知った。しかし、結び方や活用方法は知らないとできないので、生徒だけでなく、教員にも、継続的に研修会を行っていかなければならないと感じた。
　また、新型コロナウイルスの影響もあり、保護者、地域との連携が今後の課題となる。未だに減らない感染者数などを考慮し、3密を避け、実際の避難所設営などに、中学生として参加させ地域の防災・減災力を高め、生徒、地域、保護者のソーシャル・キャピタルを高め防災・減災のプラットフォームとなっ
　ていくことが今後の課題である。

７）その他（※特にあれば記述）
　今回の減災教育プログラムを受講し、生徒に災害に対し自分事として捉えさせることの重要性を一番に感じることができた。今後も継続した活動にしていきたいと考えた。
　その一環として、本校野球部を被災地に連れていき、伝承館を見学し、被災地でボランティア活動をしたいと考えた。また、将来的には現地と交流し、
　チャリティ試合をしていきたいと考えました。
コロナの情勢にもよるが、是非生徒たちに貴重な経験をさせていきたいと考えている。

学校名	15. 神奈川県茅ケ崎市立浜須賀中学校
担当教員名	小林美佐子・油木信也

活動のテーマ	自助から互助へ　～減災を自分事に、皆事に～
主な教科領域等	教科領域（　　総合　　）
活動に参加した児童生徒数	（　１　学年　２１１　人）（複数可）
活動に携わった教員数	９　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	９人【保護者・地域住民・その他（消防士６名・減災学習講師３名）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　２０２０年　１０月２日　～　西暦　２０２０年　１０月２１日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

《目的》茅ヶ崎市立浜須賀中学校は海から非常に近い立地で、生徒の学区に関しては海から５００m 以内に住んでいるという生徒も少なくない。今後何年間かのうちに起こりうるであろう大地震、その際に津波が起きた場合にも自分の命を守るために自分で考え行動できるようにする。周りの人や地域の人の命を救えるように地域の人たちと関わり、自分たちが得た知識を広め地域に貢献する。（学校教育目標：自律・貢献・共育）

《ねらい》①災害から自分の身を自分で守るために知識を身に付ける。
②オリジナルの減災マップを作成し、家庭でも災害について考える機会にする。
③地域の防災訓練でマイ減災マップを使って減災について広く地域に啓蒙する。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

①防災学習
・「災害と聞いてどんなイメージをするか」→災害に関しての基本知識をつける
②防災アカデミー（茅ヶ崎市消防職員による講演）
・「災害が起きた時の行動や気を付けること」→緊急時の心情の変化、行動する際に気を付けることを学ぶ
③防災マップ作り（減災アトリエの職員）
・マップ内に自宅、学校、津波一時退避避難場所、避難所、広域避難場所にシールを貼り、地域の立地や危険箇所を学ぶ。海抜
の低いところにマーカーでラインを引き、目印の建物から場所を把握する。
④地区防災訓練での発表（新型コロナウイルス感染予防の為、防災訓練が中止となり、実施できなかった）

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。
・研修会の中であった東日本大震災のエピソード。中学生が震災のための知識を深め、自分で考え行動できるようになっていた
為、地域の人を助けた話を例に挙げ、主体的に避難できる生徒の育成。
・主体的に行動できるようにするための基礎知識の学習、それを応用した減災マップ作りの講演会。
・地域の施設（公民館）などで、学んだ知識を地域に広げる発表を行う予定だったが新型コロナウイルスのため中止。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から
・実際に大きな災害を体験した学校の経験や経験から得たことをもとに改善していった防災・減災学習は、リアルな話が多く大変勉強になった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・事前の生徒のアンケートの中では学校以外の場所で災害が起こった時にどう行動して良いかわからないというものが多かった。減災マップ作りの後は、「自分が市内のどこの場所にいても、どこに避難し、避難後にどういう行動をとれば良いかわかるようになった」や「困っている人がいたときに助けてあげたい」というような声が上がるようになった。今回の体験から自分の知識を深め、それを実際の行動に活かすための行動力を身につけることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・活動の中で知識や具体的な行動をインプットする場面は作れたが、アウトプットする場面があってこそ、いざ本当に災害が起きた時の行動力にもつながると思う。そのためには、新型コロナウイルスが収まった際には小学校や周りの施設に今回の体験を共有できるような発表の場面を設け、アウトプットする場面を作っていきたいと思う。

・保護者からは、減災マップ作りの当日に家で話をして家族と知識を共有できた生徒もいると聞いている。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・各自が自分の活動場所を中心に、自分だけの減災マップを作れたことで、興味を持って進めることができた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・避難訓練は学校では毎年行っている。だが実際には学校外で災害に合う可能性が非常に高い。今回の体験の中で生徒の話を聞いてみると、学校外で災害に合った時の行動が分からないという生徒が多くいたことが分かった。行ってはいるが今後は学校外を想定した避難方法の知識をもっと深めていく必要があると感じた。

7）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

〇減災マップ作り活動の様子

①

②

③

4

⑤

⑥

《　減災マップ　写真の説明　》

１枚目：まず前半は、スライドで災害についての基礎的なことを教えていただいた。災害とは何なのか、実際に日本で起こった災害についての動画を見たり、実際に地震が起きてからどのくらいの時間で津波が来るのかをクイズ形式などで教えてもらったりしながら学んだ。

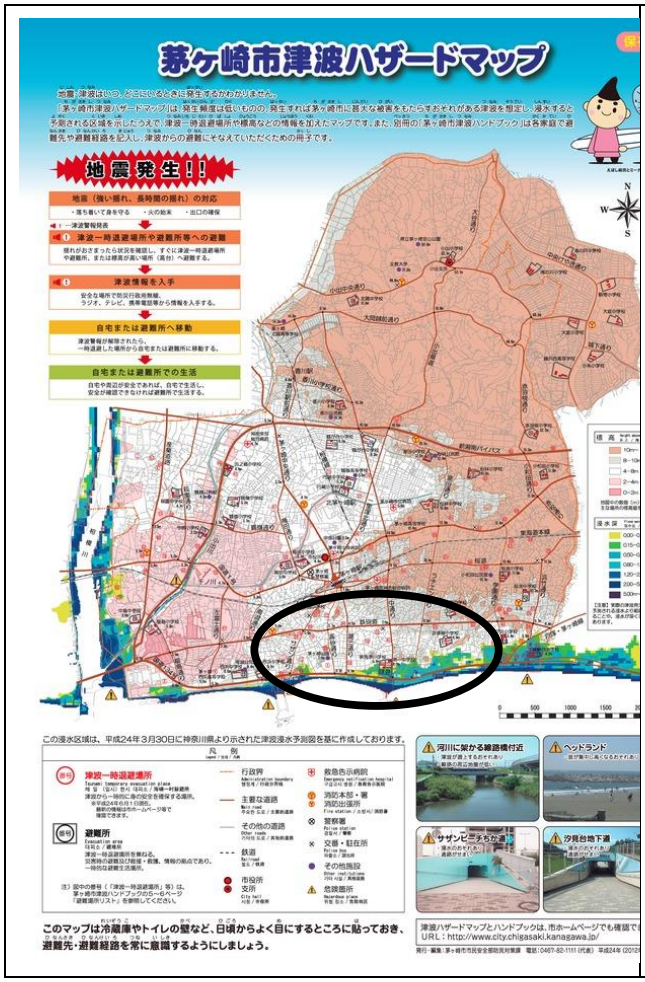
２枚目:日本で実際に起きた阪神淡路大震災や東日本大震災などのその当時の実際の映像を見て、理解を深めた。

３枚目：減災マップ作りの最初は、シール貼りを行った。自宅、学校、避難所、広域避難所、津波一時退避場所などがどういった位置関係になっているのかを理解した。

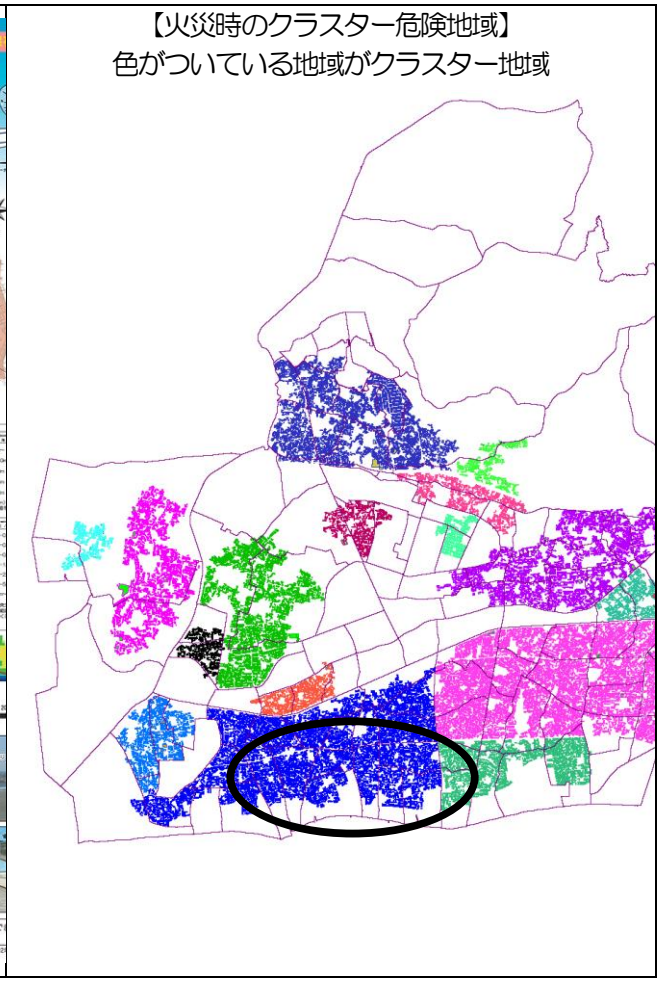
４・５枚目：自分たちが住んでいる地域の、海抜１０メートル以上の範囲はどこか、津波はどこまで押し寄せてくるのか、避難するときに使う太い主要道路はどこかなどを色分けして区分した。実際に自分でシールを貼ったり、線を引いたりすることで、より身近に考えるきっかけになるという意見も生徒から出た。

６枚目：自宅にいたらどこの道を使ってどこに避難しなければならないのか、など完成した減災マップを見ながら、講師の鈴木さんと一緒に話し合う場面も見られた。

茅ヶ崎市ハザードマップ



火災時のクラスター



学校名	16. 長野県安曇野市立堀金中学校
担当教員名	黒岩理恵子

活動のテーマ	命を守るために～災害・防災について調べ、発信しよう。
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　　）
活動に参加した児童生徒数	（主として３年２組３５人　、防災学習講演会参加は全校生徒３０９人）（複数可）
活動に携わった教員数	総合的な学習については主として１人 ※講演会では全職員３０人も携わった。
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	１２人　【保護者・地域住民・その他（被災やなど災害の関係者）　】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　２０２０年　７月　２０日　～　西暦　２０２０年　１１　月　５日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 以下にある全ての災害について、クラスで担当を決めて調査した。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・過去の災害やこれから起こる可能性のある災害を調べたり、災害に関わった人達から直接話を聞いたりすることで、災害が他人事でないと気付くことができる。

・自分たちで得た情報をまとめて発信することで、自分だけでなく他者の命も災害から守りたいという思いを持つことが出来る。

・郷土の災害の歴史を調べることで、自分たちの身近な災害に気づくことが出来る。

・発表などで全校生徒に情報を発信することで、学校全体が災害に対する危機意識を高めることができる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

７月 13 日：防災に関わる個人の追求テーマの決定

７月 17 日：情報収集方法説明、担当責任者決定

７月 21 日：東日本大震災のボランティア参加の話（本校の小平教頭より）

①班　堀金文書館および図書館の取材。資料提供のお願い。

⑤班　千曲川災害のボランティア参加者の取材

その他の班：インターネットや書籍、新聞からの情報収集

７月 31 日：長野県南木曾土砂災害の状況と、被害者の友人達のその後の歩みについて、上松中学校秋山昇校長先生よりクラス全員にお話をしていただいた。（⑥班担当）

８月３日：信濃毎日新聞社島田隆一記者による、御嶽山噴火災害取材の講演。（③班担当）

８月 24 日～：⑧班　地震学専門の大学教授より、メールで資料を提供していただいた。

②班　安曇野市役所に電話で取材をし、防災の資料を提供していただいた。

④班　栄村復興記念館に電話取材をし、資料を提供していただいた。

⑪班　石巻市立北上中学校元校長畠山卓也先生から、東日本大震災当時の中学生の行動等についての資料を提供していただいた。

⑨班　福島第一原発の被害を受けた住民の話を電話で取材し、資料を提供していただいた。

⑦班　熊本地震体験者から取材をした。

⑩班　「小さな命を考える会」代表、佐藤敏郎先生から、東日本大震災で次女を亡くされた大川小学校や、震災の俳句を作った女川中学校の話を電話で伺い、講演会を依頼した。

９月２日～２３日：収集した情報を分析し、まとめる

９月２５日：文化祭での放送、展示発表
11 月５日　人権講演会「３．１１を学びに変える」
「小さな命を考える会」代表、佐藤敏郎先生から、東日本大震災で次女を亡くされた大川小学校や、震災の俳句を作った女川中学校の話を全校生徒、全職員で拝聴した。
２月１３日～１６日：冊子原稿印刷所入稿・校正
３月１１日：冊子配布

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

３年２組の総合的な学習の中で、生徒達が「小さな命を考える会」代表の佐藤敏郎先生に連絡したことがきっかけで、11 月 5 日に本校で講演会を開いていただけることとなり、東日本大震災で次女を亡くされた大川小学校や、震災の俳句を作った女川中学校生徒の話を全校生徒、全職員で拝聴した。

拝聴しながら涙を流す生徒や職員の姿があり、命の尊さを改めて考え直すことができた。また、毎年行われている避難訓練のあり方も見直すきっかけとなり、生徒達も先生の指示待ちの避難ではなく、自分たちで考えることが大事であると気づくことが出来た。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

例年行われている避難訓練は、「訓練のための訓練」という意識がぬぐいきれなかったが、総合的な学習の成果を文化祭で全校生徒に発表したことで、発表した生徒や発表を聞いた生徒だけでなく、職員の防災への意識の変化がみられた。特に佐藤敏郎先生の講演会は、生徒の命を守る教員の立場として、本校で行われている避難訓練が有効なものであるかを見直すきっかけとなった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

東日本大震災などの被災者や災害に関わった方から直接お話を聞くことで、被災した方々の思いに寄り添うことや、災害への意識を風化させてはならないといった思い、防災意識の高まりがみられた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

保護者限定で総合的な学習のまとめを動画配信したが、それらを見た保護者の方から、「生徒達の学習意欲に感動した」「改めて防災について考えさせられた」などといった感想が寄せられた。また、情報を提供してくださった地域の文書館の関係者からも、賞賛の声が寄せられた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・一つの災害だけでなく、色々な災害を調査させた。これから起こる可能性のある災害についても調べさせた。
・一人一形態で発表することを課したことで、学習を主体的に進めることができた。
・「必ず災害に関わった方から直接話を伺うこと」を課題にしたため、ただの調査学習ではなく、災害の当事者の思いに寄り添うことができた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・コロナの影響で、今年だけの特設の総合的な学習となったので、来年度以降の継続が難しい。

７）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

学校名	17. 宮城県多賀城高等学校
担当教員名	高橋　健一

活動のテーマ	多賀城高校での学びを伝え，防災・減災学習に関心をもたせる中学校における出前授業
主な教科領域等	教科領域（　学校設定科目「くらしと安全A」　）
活動に参加した児童生徒数	（　中３　　学年　１００　　人）(複数可)
活動に携わった教員数	１　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	０　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。(複数可)
実践期間	西暦　２０２０年　１０月　２９日　　～　　西暦　２０２０年　１０月　２９日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震 ・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（傷病者の搬送時）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

中学生が，多賀城高校の学校設定科目である「くらしと安全 A」における物干し竿や毛布等を利用した簡易担架による搬送法実習を体験することで，多賀城高校での学びや防災・減災学習に興味をもたせる。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

１０／２９（金）に宮城県塩釜市立第二中学校における出前授業（3 クラス）において身近なものを利用した簡易担架による搬送法実習を行った。50 分授業の内容は，以下の通りである。

1　自己紹介・学校紹介　10 分
2　搬送法実習　　35 分　・物干し竿と毛布　・毛布のみ　・物干し竿とトレーナー
3　活動の振り返り　　5 分

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9 月研修会の学びから，東日本大震災を経験していない世代への伝承や防災意識を高めるための取り組みが必要であると考えた。本校では，日常的に防災・減災学習を行っているため，近隣中学校３年生に学校設定科目「くらしと安全 A」の搬送法実習を体験してもらうことで防災意識向上や防災・減災学習に関心をもってほしいと考えた。

本校生徒が文化祭等において地域住民や来場した家族，近隣中学生等に学んでいることなどを直接伝えたり，一緒に活動したり，考えたりする内容としたかったが，新型コロナウィルスの影響で叶わなかった。

助成金を活用し簡易担架に必要な物干し竿を購入した。このことで，搬送法による「運ぶ・運ばれる」を生徒全員に体験させることができた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

本校 2 年生が学校設定科目「くらしと安全 A」で実際に学ぶ内容で行った。災害時には身近にあるもので代用すること

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

中学生約 100 名に簡易担架による搬送法を体験してもらった。授業の中で傷病者役の生徒を乗せた簡易担架を持ち上げる際に，声をかけて力を合わせたり，身振り手振りも加えて誘導したりするなど，生徒が生き生きと活動する姿が見られた。

活動の振り返りでは，「身近にあるもので運ぶことができてびっくりした」「いざというときには今日の方法を役立てたい」「実際の傷病者を運ぶときには，もっと慎重に持ち上げたりしなければならない」「ほかにも自分にできることはないか考えてみたい」という感想発表があった。防災意識向上が感じ取れる。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

地域住民とも行いたい内容である。地域のニーズがあれば，自治体の合同防災訓練時にブースを出すなどしてできるかもしれない。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

中学生への出前授業を活用し，本校の学習内容を体験して学ぶことができるようにした。本校を志望しない生徒についても防災・減災学習に興味をもつきっかけにできた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今回の出前授業は中学生が防災・減災学習に興味をもつきっかけとして，有効であったと考える。さらに対象を広げていけるよう，別の活動内容についても吟味したい。また，本校生徒が活躍できるプログラムにしたい。例えば，本校生徒が文化祭等において地域住民や来場した家族，近隣中学生等に学んでいることなどを直接伝えたり，一緒に活動したり，考えたりする内容としたい。

7）その他（※特にあれば記述）

7）その他（※特にあれば記述）

活動の様子

物干し竿と毛布を使った簡易担架

毛布だけの簡易担架

物干し竿とジャージを使った簡易担架

学校名	18. 東京都立杉並総合高等学校
担当教員名	山﨑 靖

活動のテーマ	防災カルタの作成と地域防災力向上への協力
主な教科領域等	教科領域（　人間と社会　　）
活動に参加した児童生徒数	（　１学年　２３８人　）(複数可)
活動に携わった教員数	１８　　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（２００）人　【保護者・地域住民・その他（　近隣小学生　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。(複数可)
実践期間	西暦　２０２０年　７月　６日　～　西暦　２０２１年　３月　２２日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

防災教室での体験や学習をもとに、防災に関する知識や技術を整理し、防災カルタという形でそれを表現する。さらに作成したカルタを交流のある近隣の小学校に贈呈し、地域児童の防災意識を高めるとともに、防災教室を高校生が企画し進行することで、地域の防災力の向上に貢献することを目的とする。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

宿泊防災訓練（地元の消防署、消防団、防災ボランティア、水道局の協力による防災訓練）

具体的内容：AED による救急救命訓練、消火器訓練、傷病者の搬送法、包帯法
消防署への通報訓練、煙体験と車いすの補助、スタンドパイプの使用訓練
災害時に近隣の小中学校へ飲料水の運搬に向けた実地踏査
非常食（α 化米）の炊き出し、容器詰め、運搬配布、体育館での避難所体験

※ 緊急事態宣言下のため実施予定日に実施ができず３学期に延期したが、そちらも第２波による緊急事態宣言が発令され、年度内の実施が困難となった。

代替えの活動

避難訓練を利用して、防災士による防災講話を４回受講した。
各クラスの図書コーナーに防災関連書籍を配布し、それを閲覧した。

防災カルタの作成

１月下旬より準備活動開始
班分け　⇒　担当文字の決定　⇒　読み札の検討　⇒　絵札の検討　⇒　清書

防災カルタの完成　（１クラス１セット　合計６セット作成）
ボランティア委員が、近隣小学校へ赴き、防災教室を開いて、防災カルタを贈呈する

※　コロナの影響で年度を越えての実施となる

3）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

年度当初計画していた宿泊防災訓練が、二度の延期の上に年度内の実施が不可能となったために、すべての計画を変更しなくてはならなくなった。

９月の研修での成果も踏まえ、本校生徒の防災知識と技術の向上だけでなく、地域防災力の向上に貢献できることはないかと考え、防災カルタの作成へと方向転換した。その作成に必要な予算を計上していなかったため、資料や資材の準備のために助成金が利用でき非常に助けられた。

4）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

これまでは、生徒の防災に対する知識と技術の向上のために地域の方々に協力してもらうという形での防災訓練であった。しかしプログラムの変更により、受動的な訓練ではなく、生徒が主体的かつ自発的に活動することが中心となった。そしてその活動によって得られた知識や技術を、地域の防災力の向上に貢献するという形のものへと変化させることができた。

まだ実施できていないが、小学生対象に防災教室を開くなどの活動を通して、生徒のコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上も期待できる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

カルタの作成は、自分に割り当てられた文字についてどのような読み札にするのかということが最も難しい作業行程である。各クラスに配布された防災に関する資料から、それを生み出すことに積極的に取り組むことは、防災を受動的な活動ではなく能動的な活動に変化させることに繋がったといえる。その結果、自発的な活動風景が随所に見られた。

今年度は、合唱祭・文化祭・体育祭とすべての学校行事が開催できなかったことで、クラスが協力して何かに取り組むという機会が失われていた。カルタの作成を６人班で７文字程度の割り振りにしたことで、言葉・文字・挿絵など、自分の得意な分野で作成に協力するといった協働の機会が得られたことも大きな意味があったといえる。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

担任教師としては、入学以来学校行事が何もできなかった状況の中、クラス全員で協力して一つのものを作り上げる機会が得られたことはよかったと思われる。また、生徒の新なの一面を知る機会にもなった。

ボランティア委員による近隣の小学校での防災教室の実施やカルタの贈呈などはまだ実施できていないが、地域防災力の向上に十分に貢献できるものと思われる。

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

- 防災の知識や技術を受動ではなく自発的に学習する機会を与える。
- クラスで協力して一つのものを作り上げることの大切さを実感させる
- 活動の成果を、自校だけのものとせずに、地域に伝授し、貢献する
- 活動を通じて、地域との交流をさらに深めていく

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

コロナ禍の影響で交流といった部分での活動ができない状況であるが、そのような環境でもできる地域との交流手段を模索する必要があると思われる。

新規に始めた防災カルタづくりを今後どのように継続させるかも、検討すべき課題である。

（添付資料　① 計画している小学校での防災訓練　　② 作成された防災カルタ）

学校名	19. 和歌山県立和歌山商業高等学校
担当教員名	川口敦志・西澤優季　　（役職：教諭　教科商業「電子商取引」担当）

活動のテーマ	時代を担う若者たちの協働～校種・障がいを超えて
主な教科領域等	教科領域（教科商業「電子商取引」担当）
活動に参加した児童生徒数	（　　３学年　　２９人）（複数可）
活動に携わった教員数	２人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	１５人　【保護者・地域住民・その他（近隣２校生徒・教員　　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦２０２０年　６月　４日　～　西暦　２０２１年　１月　１４日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本校は、伝統的に地域産業界の中核として活躍する職業人を輩出してきた。卒業生は、地域経済のみならずコミュニティの担い手となっている。少子高齢化が進むなか、県内にとどまり災害弱者に対する理解ある若者の存在は貴重と言える。また、被災時、高校生には自分の命を自分で守る「自助」の力、地域の一員として、被災から復興にかけての各段階で「共助」の精神を持って活躍することが期待されている。国や地方公共団体による「公助」を待つだけでなく、主体的に判断し行動できる生徒の育成が課題である。防災・減災教育を、本校のみで帰結させるのではなく、様々な校種の生徒や地域住民との協働のなかで行うことで、地域とともに、学び、安心安全なふるさとを創造していける生徒を育むことをねらいとしている。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

県立和歌山商業高等学校ビジネス創造科３学年情報コース生徒が、県立ろう学校生徒、地域住民団体と協働し、災害弱者（聴覚障がい者・重度障がい者等）のニーズに焦点をあてた商品開発、南海トラフ地震に備える防災・減災情報、提供手段の改良と拡充を行う。商品開発については、県立和歌山工業高等学校に試作品製作や技術面での協力を依頼する。

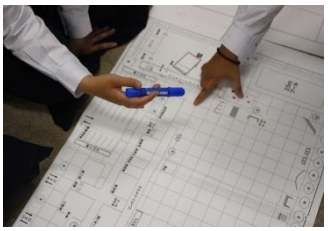
１学期：イントロダクション（本校の取組）ホームページ制作学習に取組む。

２学期：履修生徒２９名を４チームに分け、課題解決のための仮説の検討、近隣校と協働しより具体的な調査を行う。アイディア検討。実験と検証。取組成果の共有を行い課題解決に取組む。

（1）地域とともに避難訓練計画班

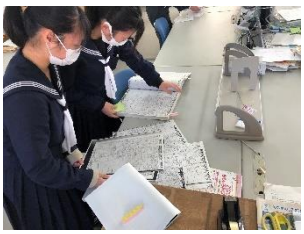
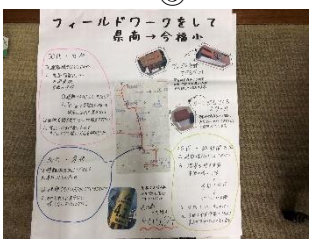
①

②


③

④

⑤

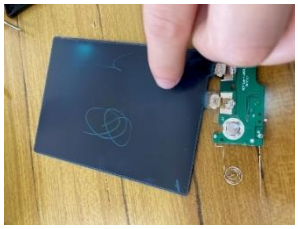
⑥

①ＺＯＯＭを用いて協力者（地域で活動されている防災士）からヒアリング

②校内の学習支援員（兼防災・減災の啓発をすすめる女性グループ代表・防災士）からヒアリング

③避難所ＨＵＧ　④防災町歩き　⑤振り返り、解説指導　⑥防災マップ製作

（2）ろう学校生徒のニーズを受けた防災減災グッズ製品開発班



①　②　③　④

①和歌山ろう学校高等部生徒からの製品企画プレゼンテーション（前年度）
②企画案の検討・改善、和歌山工業高等学校へプレゼンテーション準備
③和歌山工業高等学校でプレゼンテーション
④助言を受けて、製品構造について研究→次年度へ引継資料作成

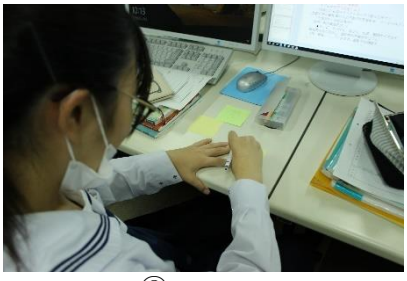
（3）生活用品を用いた防災減災アイディア動画制作班

①　②　③

④　⑤

①情報収集し、班で議論、具体的な動画制作手順の検討
②撮影に必要な道具類の準備
③リハーサル・撮影　参考サイト管理者と折衝
④編集作業（サムネイル、クレジット確認）
⑤校内稟議を経て、ユーチューブにアップロード。紹介ポスター制作・掲示

（4）ホームページ制作班



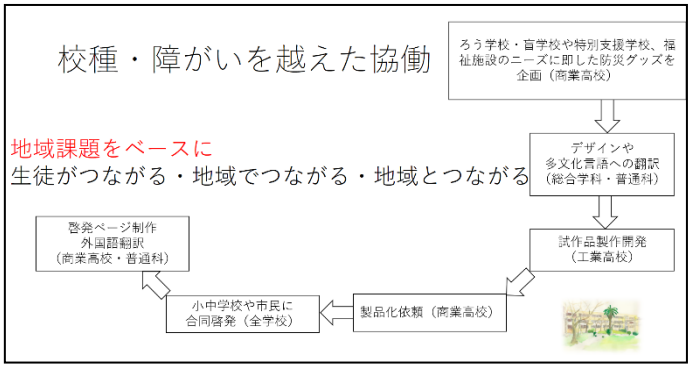
①　②　③④⑤⑥

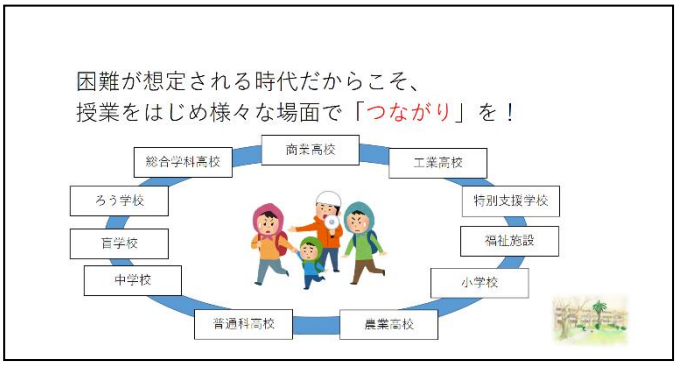
①授業毎に担当生徒が撮影、学習活動記録。防災減災についての理解。
②より防災減災について学んだことが「伝わる」ホームページの研究（ＫＪ法の活用）
③授業ホームページの更新作業　　④ブログ形式で学習活動報告の情報発信
⑤他の班からホームページ作成素案を受け、各班のページ制作
⑥表記・リンク漏れ等ないかチェック作業。校内稟議を経てアップロード。

３学期：成果発表会（校内・クラス内）で共有、総括、次年度へ引継ぐ。

左：課題研究成果発表会で２年生に向けて取組成果発表／右：バザール形式で各班生徒が他班の生徒へ
プレゼンテーション・ブラッシュアップ

本取組の最終目標（防災グッズを企画する例）





３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修会においては、各校各地域の息の続いた取組について学ぶことができた。息の続く取組には、マンパワーに依存しないシステム作りと先輩から後輩へと世代を超えた学びの橋渡しが重要だと考えた。授業展開についてもホームページ上に公開し、生徒及び教員が見通しを持って授業に取り組めるように工夫をしている。また、１、２年生について３年生からＰＲさせることにより将来の自分の姿をイメージさせている。継続性を意識し、生徒たちには次年度の後輩に向けて引継できるよう資料をまとめさせた。

昨年度までの取組では、生徒が持つ被災時のイメージは動画や講演によるところが大きかった。そのため、生徒の思考が「どう避難するか」と「被害を抑えるためにどうしたら良いか」といったものが多く、「被災後の生活」にも目を向ける者は限られていた。

助成金を活用し購入した避難所運営シミュレーションゲーム（避難所HUG）を経験した結果、率先避難はもちろんのこと、避難先で起こる問題を知り、避難所運営を担っていく貴重な人材であることを自己認識することができた。また、この前後に協力者でもある防災士から、阪神・淡路大震災の当事者として避難所で目にした理不尽な差別や事件なども講演頂いたこともあり防災のみならず、人権意識についてもより深く考察することができた。今年度はコロナ禍での実施となり、ウェブカメラを活用したＺＯＯＭでの講演を実現でき、遠方とのコミュニケーション手段を得ることができた。

避難所HUGのセットを取り揃えたことにより、近隣校の生徒と一緒にシミュレーションを行ったり中学生に指導する授業展開を計画できるようになった。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

校内と校外に２人も防災士の協力者を得ることができているので複数の視点から防災について学ぶことができた。男性からは、オンラインを含め全４回（うち２回は全ての班が参加）講演指導、助言を頂いた。避難所運営、町歩き・防災訓練、被災後のトイレ問題について事例を交えて話して頂いた。また、全班の取組状況について聞いて頂き助言下さった。女性からは、女性特有の問題について話して頂くとともに震災時の性被害や予防策についてもお話頂いた。

内容は、一過性のものでなく、毎年内容を深化させながら事前に相談し生徒の様子についてすりあわせを行い事後に振り返っている。また、記録をホームページに残しておくことでイメージの共有を図っている。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

「トライ＆エラー」をいとわず、何事にも積極的に挑戦し続ける姿勢を持つ。より広い視点で物事を捉え、人と協力して課題解決にあたることができるようになった。防災、減災活動を自分事として考え、自助・共助の意識をもち地域コミュニティを形成する意識を持つに至った。

学びを通して、物事の先を常に意識するようになった。一つの意見や案に対し、別の角度から考えたり条件が変わったときにどう対応していくべきか考えるようになった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

ＬＩＮＥのグループ機能を活用し、班の情報共有を自主的に行った班がある。自分事として、取組を進め出すと生徒たちの創意工夫が活かされる場面が多々あった。取組内容を４分野に絞り、生徒たちに選択をさせた。人数調整も自分たちでできなければ、教員で振り分ける旨伝えたところ自主的に選択班を移動した者も居た。その様子を見ていた班員は、移動してくれた生徒に対し、その分頑張ることを誓ったという。移動した生徒も気持ちを切り替え精一杯プロジェクトに参加した。

「いのち」という自らの課題とともに、家族の、地域の課題でもある「南海トラフ地震に対する防災減災」というテーマに一貫して取組を続けた。このテーマは一過性のものではなく、時には授業時間外においても進めるだけの価値のあることをやっているのだという自負を持たせるに至った。

協力者に対しての依頼やお礼、報告等の関係で期限を切って示すことはあったが強制的に残したり評価をちらつかせることは終始行わなかった。それでも自分たちの行うべきことを最後までやり切る持ち前の誠実さと、一緒に取組を進める仲間の存在が生徒たちを動かしたのだと考える。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

① 分野別プロジェクトの設定と役割分担（１人１役）　② 教科教育に防災減災を掛け合わせた授業展開

③ オンラインによる双方向の外部講師とのやり取り、対面での指導と事前のすりあわせ

④ ティームティーチングによる情報共有ときめ細かい指導

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

各プロジェクト同時進行ということもあり、プロジェクト成否の鍵となるのが班長の存在であった。班長の呼びかけにより進度が変わる。挑戦意欲を持って立候補した班長も居たが、仕事の采配等でフォローが必要な場面が多々あり、メンバーが困惑することもあった。意欲を評価しつつも、自然と入れ替えることができる仕組みを作ることも必要だと感じた。

コロナ禍において移動が制限されるなかで、より防災減災教育の質的な向上を図るためにオンラインでの外部との交流が重要になってくると思われる。近隣校やできれば想いを共有する他都道府県の学校と授業展開のすりあわせを行ってオンラインによる相互発表や学習活動の協力（意識調査など）を進めていきたい。

公開と共有を前提に、学習内容のコンテンツ化を図る。ＹｏｕＴｕｂｅの他、地域の各関係機関や教育施設、住民団体等に広報を行うとともに防災減災でのニーズを把握する。地域のニーズをしっかりと捉え、より具体的な取組になるように改善を行う。

商業を学ぶ高校生の特性として、検定取得に意欲的であることが挙げられる。一般財団法人防災教育推進協会主催防災検定やエコリテラシー協会主催子ども防災検定も紹介し、防災意識向上のみならず知的理解を定着させることも考えられる。また、小学生や中学生を対象に、専門的な助言を得てオリジナルの地域版防災検定問題を作成する。本校コンピュータ部に協力を依頼しホームページ上で出題と解答、答え合わせができるシステム開発も可能だと考えている。

避難訓練については、本年度は地震を想定したもので、一部の区間の防災マップ作成にとどまっていた。また、避難所運営についてシミュレーションできる教材と経験を得たため来年度は更に深化を考えている。避難行動を掘り下げて体験教材も活用し防災マップの拡充と公開を検討していく。

来年度は生徒数が減少するため、プロジェクトを発展統合させていく。ねらいである様々な校種の生徒や地域住民との協働のなかで行うことで、地域とともに、学び、安心安全なふるさとを創造していく姿勢に変わりはない。

７）その他（※特にあれば記述）

作ページ QR コード　　動画 QR コード

学校名	20.神戸大学附属中等教育学校
担当教員名	石丸　幸勢

活動のテーマ	DR3(Disaster・Reconstruction・Reduction・Resilience)活動と課題研究の防災・減災ネットワークによる支援
主な教科領域等	教科領域（　特別活動、総合的な学習、課外活動　　）
活動に参加した児童生徒数	（　　3～6　学年　　22　　人）(複数可)
活動に携わった教員数	3　　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	4　　人　【保護者・地域住民・その他（本プログラム他の助成校)】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。(複数可)
実践期間	西暦　2020 年　7 月　9 日　　～　　西暦　2021 年　3 月　31 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

震災・復興・減災・レジリエンス（以下ＤＲ３）について生徒が主体的に学ぶ機会を提供することで、生徒一人ひとりの災害に対するリスクマネジメント能力を高めていきたい。校区の広い本校では生徒の居住地域により想定される災害が異なる。学校で一律に進める防災学習では当事者意識を持つことができない。そこでＤＲ３活動に所属する生徒に校内の防災学習を計画・進行・評価させることで、「災害を生徒自らが考え学ぶ学校」と一般生徒への意識づけを図りたい。また、ＤＲ３活動と災害をテーマにした課題研究との連携を図ることで、ＤＲ３が交流している県外学校の協力を得て、想定災害の異なる地域との比較や大災害への被災後経過年数による意識差などを調査・分析させて全校生徒へのフィードバックを図る。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

【ＤＲ３活動（特別活動、課外活動)】

①校内防災学習

・昨年度の実施プログラムと重複しないように、実施プログラムを割り当てるか新たなプログラムを開発する。交流校と事前に試行して助言を受け、教材の改善・改良を図る。

・昨年度はハザードマップづくり、救命シミュレーション、クロスロードを実施し、今年度は新たに避難所に関するプログラムを検討する。

②他校との交流

・昨年度交流校と継続的、発展的に交流を進める。

・宮城県多賀城高等学校と滋賀県立守山中学・高等学校と月に１回程度のオンライン交流と年１回の相互訪問で対面交流を計画する。

③地域公立中学校への出前授業

・校内で実施した防災学習を評価・改善した学習プログラムを、地域公立中学校の生徒会役員を対象に授業を行い、生徒主体の進め方を伝達する。生徒会役員は自校の防災学習を進行するだけでなく、地域小学校に出向いて授業を行う。

【課題研究災害ゼミ（総合的な学習)】

④SSH 校交流による課題研究支援

・定期交流 2 校に加え岩手県立釜石高等学校と鳥取県立西高等学校の計 4 校と課題研究（防災領域）について交流を図る。

・課題研究で必要なアンケート実施や資料収集について相互に協力し、各校のプログラム（専門家による講演会）にオンラインで参加する。

・各校の研究成果をオンラインや相互訪問で生徒発表する機会を設定する。

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①助成校による課題研究支援

本校の縦割り学年で編成している課題研究の防災・減災ゼミで、本プログラム助成校の取り組みや資料提供など個々の研究活動への支援を求める。

②研修プログラムによる動機づけ

ＤＲ３活動を推進する生徒たちの強い動機づけとするために、宮城県と岩手県の被災地域を訪問して震災遺構や語り部から東北大震災をリアルに感じさせ、宮城県多賀城高等学校と岩手県立釜石高等学校で互いの課題研究を発表させる目的で、2021 年 1 月 20～22 日の予定で研修プログラムを計画した。

４）実践の成果

1 月 7 日の緊急事態宣言発出により研修プログラムは中止となり、宣言解除後の県内代替プログラムを模索中である。計画の一部が中止・延期されたため、現時点で実施した校内防災学習と課題研究の防災・減災ゼミの活動について成果を報告する。

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

〈校内防災学習の計画と進行〉

1 月 14 日にＤＲ３メンバーが防災学習を計画・進行した。1・2 年生は各学年・クラスでクロスロード（神戸版）、3～5 年生は縦割りの課題研究グループでＤＩＧを実施した。ＤＩＧは市販品ではなく定期的に交流している宮城県多賀城高等学校生徒会が作成したオリジナルの図面を作成者の了解を得て使用した。

昨年度まで課題研究は単一学年で進めたため、減災・防災をテーマに取り組む生徒は各学年 2～3 名で、学年ごとに指導を受けることで深まりがなかった。本年度から複数学年で構成したため減災・防災をテーマにする生徒 12 名が集まり、震災、風水害、パニック、安全保障等の災害についてゼミを進めることができた。さらに本プログラム参加校テーマ一覧をセミ生徒に紹介した。個々の研究テーマと関連する助成校に資料提供の要望があり、ユネスコ協会を通じて各助成校に協力を求めた。以下の助成校より資料提供があり、対象生徒が進める研究の参考とした。

大治町立大治南小学校、大牟田市立みなと小学校

大牟田市立白川小学校

〈防災学習プログラムの開発〉

減災教育フォーラム発表者の南阿蘇中学校より提供された資料を参考に、熊本県の被災地域における減災防災教育プログラム開発のため 3 月 12・13 日に教員 1 名で熊本を訪ねた。阿蘇火山博物館、新阿蘇大橋、益城町、熊本城、人吉観光協会、人吉・渡地区、西原村を訪問し、被災・復興状況と学習プログラムとしての可能性について各担当者と意見交換を行った。「2 度の震度 7 の揺れに心的ダメージが大きくて諦めや絶望を感じた」という証言、河川氾濫による被災が大地震や津波とは異なる様相であったこと、などが印象に残った。

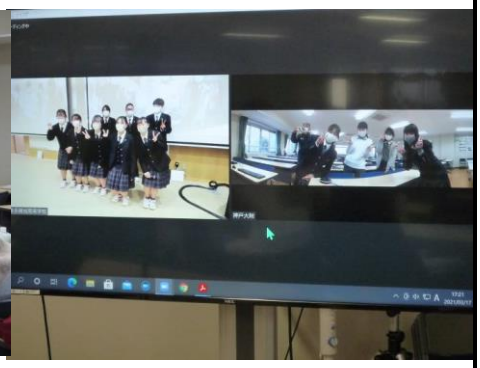
新阿蘇大橋（3 月 7 日開通）　　熊本城（空中通路での特別公開）　　人吉・渡地区の浸水家屋

〈課題研究オンライン発表会〉

3 月 17 日に多賀城高等学校との課題研究発表会をオンラインで開催した。本校からはＤＲ３メンバーから 2 名と防災ゼミから 1 名、多賀城高等学校からは防災科学科の 3 組が発表した。（生徒の様子）　以下に本校で発表した研究テーマを紹介する。

【本校課題研究発表テーマ】

・「干し野菜を回転備蓄にするための考察ー災害食の献立提案ー」
・「地震発生時における視覚障害者の避難支援についての提案」
・「幼児の日常的な防災意識を高める新たな防災教育の提案―映像記憶能力に注目してー」



②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

防災学習を経験した一般生徒を対象にした事後アンケートでは、昨年度と同程度で 5 段階中の 3.9 点であった。生徒主体の防災学習を開始した初年度（2017 年度）はその前年より大きく更新したが、2 年目からは同程度の高い関心を示している。1 月から導入したＢＹＯＤによりＤＩＧでは生徒が持参した情報端末を積極的に活用する姿が見られた。1 年生では学年の総合的な学習で阪神淡路大震災を扱ったことで、自然災害や本校の防災体制について興味を持ち、1 月中は昼休みと放課後に 1 年生からインタビューを多数受けることとなった。数字からは分からない関心・意欲の高さを感じることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

本校が生徒主体で防災学習を計画・進行し、減災・防災に取り組む他校との交流を始めてから 5 年目となる。
生徒の危機管理意識を高めるためには、主体的な学習機会が必要であること、教科や総合的な学習と関連させると効果的であること、を職員で共有でき学校体制で取り組めるようになった。また 2 年前より避難所準備と初期対応を当番制としたことで、地域や自治体の固有課題への認識や日頃の安全点検意識が高まった。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

生徒主体で計画・進行する防災学習を、校内だけでなく地域の公立校で出前授業を計画している。コロナの影響で訪問や対面が困難であるが、オンライン等で可能な限り発信する。

減災・防災をテーマとして課題研究に取り組んでいる高等学校と研究成果の発表会を開催する。現時点では宮城県多賀城高等学校と岩手県立釜石高等学校、鳥取県立鳥取西高等学校、滋賀県立守山高等学校とそれぞれに交流を計画している。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

３月に宮城県多賀城高等学校・防災科学科と本校課題研究の減災・防災ゼミがオンラインで研究成果を発表する予定である。今後は複数校の同時交流や各校とつながりのある他校との新たな交流など、交流の輪を拡大していきたい。本プログラム助成校とも互いの取り組みの助力となる連携を模索していきたい。

高齢化が進んでいる地域防災福祉コミュニティはコロナの影響で文書会議のみとなっているため、ＤＲ３がコミュニティ会議に参加して地域課題を共有する機会がない状況である。現状が収束傾向となれば計画していた地域連携を進めていきたい。

学校名	21. 長野県上田養護学校
担当教員名	教頭　星合祐一　自立活動専任　防災安全係主任（防災士）宇野千登世

活動のテーマ	地域との連携・協働を重視したタイムライン（学校防災行動計画）の作成と避難や防災に対する意識を高めるための取り組みー特別支援学校における防災計画と防災教育のあり方ー
主な教科領域等	生活科/中学部社会１段階・2 段階「地域の安全」/高等部社会１段階・2 段階「我が国の国土の自然環境と国民生活」
活動に参加した児童生徒数	（　小学部・中学部・高等部　合計２１７人）（複数可）
活動に携わった教員数	１５８　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	２５０　人　【保護者・地域住民・その他（　消防団員）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　2020 年　　4 月　1 日　　～　　西暦　2021 年 3 月 16 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本校は、上田市の東部、東御市に近い地域にある知的障がい特別支援学校である。児童生徒は、小学部・中学部・高等部・重度重複障がい学級・訪問教育部　計 217 名である。校舎のすぐ横には、冬、白鳥が飛来する千曲川が流れ、その土手では小中学部児童生徒が散歩をしたり、高等部の生徒は毎日の日課の中でマラソンを行ったりして、学校生活を行っている。しかしながら、この自然豊かな千曲川が、時には牙をむき、令和元年度 10 月台風 19 号の際には、すぐ近くで越水が見られ、主要道路が台風によって流されるという災害が起こった。つまり、立地条件的に早い段階での避難が最大の課題であり、今年度は、タイムライン（学校防災行動計画）を作成し、引き渡し訓練を実施した。

また、特別支援学校における防災計画するだけでなく、認知発達に応じた防災教育のあり方を地域・学校・保護者と共に、連携と協働に視点を置きながら取り組むためにはどのようにしたら良いのかということを含め、学校防災安全係チームによりで検討し、活動を展開してきた。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

①令和元年 12 月　　タイムライン作成会議
②令和２年４月～　　タイムライン作成と周知・第２次避難場所の変更と連絡
③令和２年７月　　タイムラインに従った引き渡し訓練の実施（生徒の安心安全を第一に考えた早めの避難）
④令和２年９月～　　避難訓練を行い、その前後で防災教育授業の実践
⑤令和２年 10 月　　変更となった第２次避難所までのルート確認
⑥令和２年 10 月～　防災ポーチ作り研修（計６回）
⑦令和２年 12 月～　来年度訓練計画案の作成と機能的な安全点検のための仕組み作り

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

助成金を受けることが可能になり、来年度の引き渡し訓練は、購入させていただいたトランシーバーを利用した訓練が実践可能となり、来年度の引き渡し訓練の計画案を修正することができた。また、防災意識を高めるきっかけとして、念願だった防災ポーチ研修を地域、保護者、教員を対象に計６回開催することができた。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

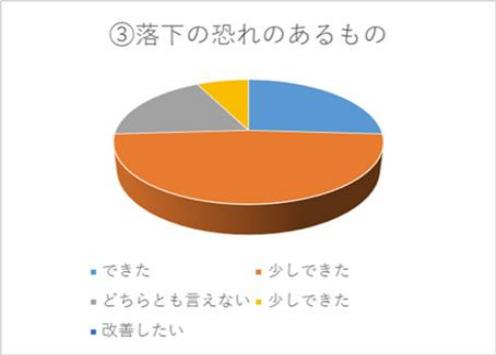
下記のアンケート結果から、一人一人が防災に対する意識を高めることができたように感じる。具体的には、教室環境の整備のために整理整頓を心がけところから始めるという視点で、防災・減災教育活動のスタートを切ることができたように感じる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

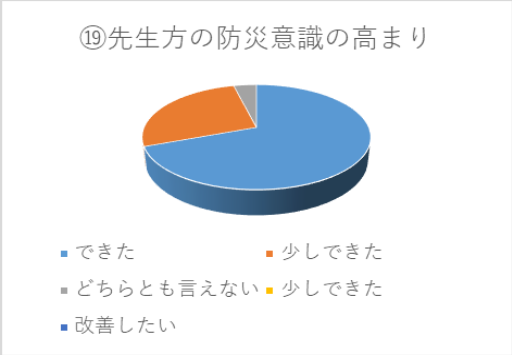
訓練の事前学習として、認知発達に合わせ、シンボルを用いた視覚支援教材を作成し、提示したことで自閉スペクトラム症等を含めた児童生徒が不安定になることが少なくなった。また、「ダンゴムシ」のポーズを見せ、事前学習をしておいたことで、９月に行われた避難訓練ではできなかった机の下に隠れるという行動が、11 月の緊急地震速報対応訓練ではできるようになった児童生徒も見られた。これらの点から児童生徒自身の自助力の育成につながったのではないかと考える。

③教員や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

本校は、広いスペースをパーテーションで仕切るような可動式の壁が多く、収納が少ないという教室環境の元、地震に対する備えとしての、教室環境整備が課題であったが、避難訓練や緊急地震速報対応訓練の事前確認を通して教室環境における意識づけを少しずつ取り組むことができ始め、少しずつ固定等を始めたので、先生方の意識の変化も感じることができた。以下は、訓練後にとった教員の意識調査の結果である。



グラフ（1）教員の避難訓練における意識調査
③落下の恐れのあるもの



グラフ（2）教員の避難訓練における意識調査
⑲防災意識の高まり

参考資料　今年度実施した活動の様子

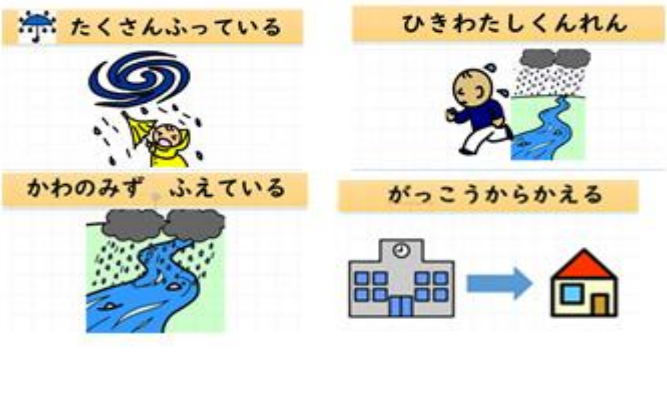
「2019 年　タイムライン作成会議」

「2020　防災ポーチ研修会」

「研修　防災ポーチに入れたい中身」

「避難経路図」

「訓練前の視覚支援教材　引き渡し訓練」



５）自校の実践で工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

以下の５点を踏まえ、校内（先生方）や校外と（保護者、事業所、地域、消防団、市役所、公民館、危機管理課、千曲川河川事務所等）との連携ができ、共助の視点から連携と協働がはかることができたのではないかと考える。

①タイムライン（学校防災行動計画）作成の際には、タイムライン作成会議を実施し、学校防災アドバイザーの大学の先生方や千曲川河川事務所の方々、行政の危機管理課の方、地域の方々、保護者の意見をブレーンストーミングで出していただく形で、アドバイスを聞き、その上で作成した。

②タイムラインの周知、協力の際には、防災安全主任と本校の校長、もしくは教頭が同行し、お願いする形で地域の方々に広めた。また、タイムラインにそった引き渡し訓練でも、消防団の方々と一緒に活動できた。

③2 次待機場所（2 次避難場所）の変更については、保護者の方にルートを確認していただくための機会を設け、本校職員がルートのポイントに立ち、道案内を行った。保護者からは、「新設した公民館でカーナビに場所が反映されなかったので、道案内をやってもらいありがたかった」という報告を得ることができた。

④生徒に防災意識を伝えるのは、まずは、教員であり、保護者であると考え、今年度頂いた助成金を使って防災ポーチ作り研修を地域、保護者、先生方向けに実践した。来年度は、生徒向けの授業を実践予定。

⑤訓練の前に学習教材として、認知発達に合わせた児童生徒向けの視覚支援教材を係で作成し、提供した。また、避難経路図も写真を使った視覚支援教材を紹介し、活用してもらった。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今年度の実践では、タイムライン（学校防災行動計画）の作成によって、いつ　どこで　誰が　何をするべきかということが明確になったので、教職員、保護者、地域の方々との共通理解のもとに連携・協働ができ始めたように感じる。現状、知的障がいのある特別支援学校では、防災教育に対して様々な課題から積極的に取り組めていない傾向もみられる。しかしながら、災害大国である日本で暮らしていくためには、災害が起こった時にどうすれば自分の身を守ることができるのかを身に着けること（自助力）が、自分の命を守ることに繋がると感じる。今年度から始めたシンボルや写真を用いた視覚支援教材と絵カードコミュニュケーションによって、認知発達に合わせた防災教育が進められ、知的障害のある自閉スペクトラム症を含めた児童生徒がパニックになることが減ったという報告も見られた。今後も児童生徒の実態、認知発達に合わせた防災教育の推進をはかりたいと考える。また、災害時命の危険が伴う重症児者の防災の視点から、発電機などを関係者で検討し、準備していくことも必要であると考える。

７）その他（※特にあれば記述）

今後、防災減災に関わる教育は、SDGS をイメージして作られていくと考える。私は、SDGS 踏まえながら、最も重要であると考えるのが認知発達に応じた視点と自助力の育成であると考える。どうすればより児童生徒にわかりやすい活動の内容になるのかその点を明確化して、授業やカリキュラムの作成を行うことが重要であると考える。

家庭用　上田養護学校タイムライン（学校防災行動計画）　令和２年９月

【基本的な考え方】
①児童生徒をより安全な段階で、保護者に引き渡す→レベル２
②引き渡し後の保護者や教員の安全も考え、余裕をもった避難を行う
レベル１の水防団待機水位０．８ｍで※「引き渡しの可能性があります」
レベル２の氾濫注意水位　１．９ｍで※「引き渡しのためお迎えお願いします」

2次待機場所（避難場所）
神川地区公民館
住所：長野県上田市蒼久保1212-1
電話：0268-71-6553
最寄り駅：信濃国分寺駅

作成：　上田養護学校　防災安全係

警戒レベル	洪水予報	生田の観測地点	上田養護学校	保護者
レベル１	警報級の可能性		前日まで大雨台風情報があった場合、休校の検討。 休校が決定したらオクレンジャーで保護者連絡を行う。	オクレンジャー受信「明日は、休校になります。」
レベル１	警報級の可能性	水防団待機水位0.8m	水防団待機水位0.8mになったら、オクレンジャーで「引き渡しの可能性があります」という連絡を行う。 ※オクレンジャーの返信のない家庭に、担当職員から電話で確認をとる。 ※学校体制を整え、引き渡しの準備を行う。	オクレンジャー受信「お迎えの可能性があります。」 ※既読していない場合、担当職員から電話連絡がくる。
レベル2		氾濫注意水位1.9m	氾濫注意水位1.9mになったら、「お迎えに来てください」という連絡を行う。 ※単独通学の生徒もお迎えにきていただく ※部ごとに生徒を掌握しながら、引きわたす	オクレンジャー受信「引き渡しの為お迎えに来てください」→返信「どのぐらいでお迎えに来ることができるか時間を記入」→お迎えにくる ※ラミネートされた名前カードをフロントガラスに、名前を見える方を外に向けて、見えやすい場所に掲示する。 ※指定の場所にお迎えに行き、引き渡しカードにサインをし、児童生徒と一緒に帰宅する。 小学部 1年　1組 うえだはなこ
			小学部：小学部棟非常口より引き渡し 中学部：隣接地スクールバスより引き渡し 高等部：小学部玄関より引き渡し なのはな：高等部玄関より引き渡し ※児童生徒の実態に応じて、レベル１水防団待機水位の段階で引き渡し予定 訪問学級：登校している場合は、レベル１の段階で保護者とともに下校予定	
レベル2		氾濫注意水位1.9m	※オクレンジャーから50分後→引き渡しが完了していない保護者へ神川地区公民館に移動することを電話連絡 ※およそ60分後二次避難開始 神川地区公民館への移動は、 ①スクールバス ②スクールバスに全員乗車できない場合のみ職員の車で移動する。	※オクレンジャーから50分後に、2次待機場所（避難場所）である神川公民館に移動することを担当職員から聞く。非常時には、担任の携帯電話から連絡がくる。 ※オクレンジャーからおよそ60分を経過した場合は、神川公民館にお迎えに行き、児童生徒と一緒に帰宅する。
レベル3	氾濫警戒情報	避難判断水位3.1m	2次待機場所（避難場所） 神川公民館	学校での引き渡しは、オクレンジャー一斉配信後60分を目途とする。 ※水位上昇が想定を超えていく場合、60分を待たずに移動する場合もあるので、要注意！
レベル4	氾濫危険情報	氾濫危険水位4.0m		
レベル5	氾濫発生情報	氾濫発生		

＜水害・土砂災害の防災情報は、「警戒レベル」で避難情報を確認します＞

住民が取るべき行動	警戒レベル	避難情報等
命を守る最善の行動	警戒レベル５	災害発生情報
全員避難	警戒レベル４	避難指示（緊急）・避難勧告
高齢者等は避難	警戒レベル３	避難準備・高齢者等避難開始
避難行動の確認	警戒レベル２	大雨注意報・洪水注意報
災害への心構えを高める	警戒レベル１	警報級の可能性

学校名	22.愛知県立一宮東特別支援学校
担当教員名	岡田恵子

活動のテーマ	地域防災ネットワークプロジェクト～避難所体験をしよう～
主な教科領域等	教科領域（　職業・家庭　）
活動に参加した児童生徒数	体験型授業（高等部3年46人）、避難所見学コーナー（全校児童生徒約300人）
活動に携わった教員数	体験型授業15人、避難所見学コーナー　約70人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	4人【保護者3人・地域住民・その他（一宮市井端地区民生委員1人）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦2021年1月8日（金）　～　西暦2021年1月29日（金）
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

- 防災活動を通じた交流を進め、学校、PTA、地域の地域防災ネットワークづくりをする。
- 避難所見学コーナーを設置し、模擬避難所や非常食の見学を通して、全校児童生徒の減災への意識を高める。
- 家庭の備蓄に関するアンケートを行い、保護者の意識向上を図り、家庭での備蓄の大切さを啓発する。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

	実践内容
2020.9	・　職員打ち合わせ会議にて本プログラム助成校決定連絡
2020.10	・　市役所訪問、協力依頼 ・　NPO法人レスキューストックヤードへの本プログラムアドバイザー依頼 ・　PTA会長との打ち合わせ、本部役員参加の依頼
2020.11	・　生徒指導部打ち合わせ会議にて「避難所見学コーナー」詳細案提案 ・　職員打ち合わせ会議にて「避難所見学コーナー」詳細案提案
2020.12	・　管理職打ち合わせ会議にて体験型授業「避難所体験をしよう」計画案提案、新型コロナウイルス感染症対策確認 ・　体験型授業計画案について、レスキューストックヤード、PTA会長との打合せ ・　一宮市役所へ防災用品等借用申請 ・　全校保護者対象「家庭の備蓄状況に関するアンケート」調査実施、集計 ・　一宮市障害者自立支援協議会での講演「発達障害の理解と支援～障害児とかかわる人の災害への備え～」のYouTubeを使用した期間限定配信を避難所見学コーナーでお知らせ、地域支援部と連携。
2021.1	・　一宮市役所にて防災用品等借用 ・　「避難所見学コーナー」設置、保護者アンケート結果の掲示 ・　一宮市障害者自立支援協議会での講演「発達障害の理解と支援～障害児とかかわる人の災害への備え～」のYouTubeを使用した期間限定配信のちらし配布（地域支援部） ・　一宮市井端地区民生委員及び本校学校評議員へ、体験型授業「避難所体験をしよう」への参加依頼 ・　学年打ち合わせ会にて体験型授業「避難所体験をしよう」計画案提案 ・　体験型授業「避難所体験をしよう」実施

3）　9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

① 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと

・　本プログラムの連携のため、積極的に外部へ働き掛けた。一宮市役所危機管理課を訪問、避難所見学コーナーで使用する掲示用ハザードマップの提供、避難所設営用パーテーション等の借用という形で連携できた。PTA 本部役員の方々とは、防災体験授業への参加協力、保護者への減災に関する啓発活動についての相談等、こまめに連絡を取り合い、連携できた。1 月の緊急事態宣言発表を受け PTA 主催の避難所体験が中止になったが、来年度も連携し合い、保護者への啓発活動を行っていくことを確認した。

② 研修会を受けての自校の活動の変更・改善点

・　学校全体と関連させた活動とするために、「避難所見学コーナー」を本校体育館ステージに 15 日間設置し、全校児童生徒が見学できるようにし、減災への意識を高める活動を追加した。

・　一宮市役所危機管理課に本校の考える地域との連携について伝えたところ、県立学校である本校は、災害が起きたときに地域の避難場所の拠点として機能することは不可能であること、障害者への配慮などはほとんど想定されていないため、市民の非常食や毛布等も人数分の備蓄はされていないため、市民の自助や県や国の支援に期待している部分が大きいことが分かった。つまり、自助力の向上が必要であると実感し、児童生徒の減災意識を高めるだけでなく、保護者への啓発も必要不可欠であると痛感した。よって「家庭の備蓄に関するアンケート」を行うこととし、集計結果を見学コーナーに掲示した。

③ 昨年度までの実践と今年度の実践で変わった点

・　減災教育プログラムに採択されたプランということで、生徒指導部を中心として、学年や学校全体で取り組むことができ、多くの協力が得られ、実践の対象を全校児童生徒に広げられた点。

・　他の校務分掌とも連携ができた点。地域支援部からの情報提供があり、一宮市障害者自立支援協議会主催、愛知県立大学看護学部准教授　柴　邦代氏による講演会「発達障害の理解と支援～障害児とかかわる人の災害への備え～」の Youtube を使用した期間限定配信のちらしを避難所見学コーナーに置き、保護者への啓発を行えたこと。

④ 助成金の活用で可能になったこと

・　本プログラムのアドバイザーとして、NPO 法人レスキューストックヤードとの連携ができたこと。早くから被災地に入って活動されている経験に基づいたアドバイスは、非常に参考になり、勉強になった。

・　避難所見学コーナーでは、より実際に近い形で避難所を再現することができたり、アウトドア用品を活用した備えについての提案ができたり、学校で備蓄している非常食に加え、様々な非常食を掲示したりできたこと。

・購入したテント等を使用した体験型授業が可能になり、NPO、地域の方、保護者の方と一緒に授業実践ができたこと。

4）実践の成果

① 減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・　一日のみの体験ではなく、学校全体で取り組める活動となるように改善したことで、全校児童生徒を対象に実践することができたこと、全校を対象としたことで、PTA との連携をより深めることができたこと。

・　積極的に外部へ働き掛けたことで、NPO、行政との連携が新たにできて、地域との連携も継続できた。行政の話から、当初考えていた連携が難しいことが分かり、本校の児童生徒とその保護者にとって、どのような減災教育活動が必要か、学校全体で考えることができた。

・　生徒指導部中心に実践の展開を行ってきたが、「避難所見学コーナー」を設置したことで、校務分掌を超えて地域支援部とも連携することができた。

② 児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・　レスキューストックヤード浦野様の講演の場面では、東日本大震災の実際の映像を見て、机の下に避難することや「大丈夫だよ」と声を掛け合うことの大切さを知ると、話を聞きながらうなずいたり、顔を見合わせたりしていた。想像することが難しい生徒たちであるが、考えながら話を聞いているのがよく分かった。体験の場面では、体育館で横になる、足音を聞く、アルミシートで暖を取る、模擬避難所で寝てみる、少ない水で手をきれいにする、非常用トイレに座るというような体験を通して、何かを教えてもらうのではなく、自分で感じよう、考えよう、自ら進んで取

り組もうとする主体的な態度が見られた。振り返りの場面では、ここで一晩明かすのは嫌だと感じたこと、何があれば自分は安心できるか考えたこと、協力したり声を掛け合ったりすることが大切ということなどを自ら感じ、学び取ったことを積極的に発表できた。

・　「避難所見学コーナー」を見学したり、授業で活用したりする中で、避難所とはどのようなところかを知るだけではなく、防災頭巾のかぶり方や災害時の避難の仕方も合わせて確認できた学級もあった。小学部、中学部の児童生徒たちも、自分の命を自分で守ろうとする意欲的な態度が見られた。

③　教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・　体験型授業や見学コーナーでの実践を一緒に行うことで、生徒達の反応を間近に見ることができ、体験を共有できることそのものが貴重な機会となったこと。災害が起きたとき、児童生徒は、地域の方々と避難したり、避難所で過ごしたりすることとなる。今回は、新型コロナウイルス感染症予防のため、地域の方も保護者も限られた方しか参加していただくことができなかったが、授業の中で災害が起きるという非日常なことを体験することそのものの重要性を実感した。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・　「避難所見学コーナー」では、展示物に手書きのポップをつけ、児童生徒の興味を引き出したこと。アンケートの集計結果の掲示や地域支援部と連携したちらしの設置など、保護者へ向けて、災害時だけでなく、災害時に備えた平素からの準備を啓発できるような情報を提供したこと。

・　体験型授業「避難所体験をしよう」では、一宮市から借用した防災用品で作った「一宮市コーナー」と家にありそうなテント等アウトドア用品で作った「テント型コーナー」の２種類用意し、プライバシーの確保や安心感、防寒など快適さなどを比較できるようにしたこと。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・　今年は新型コロナウイルス感染症予防策を取る必要があり、見学の仕方や防災授業の実施方法、参加者等、制限しながら取り組んだ。新型コロナウイルス感染症の拡大は、私たちの生活を変えるだけでなく、災害への備えや防災訓練、減災教育の在り方まで変えようとしている。今後は、新たな視点で取り組む必要がある。今年度、新型コロナウイルス感染症予防のため、職業・家庭や生活単元学習の授業において調理実習が全くできなかった。来年度も同じ状況が続くのであれば、調理実習の代わりに減災教育を取り入れ、今年度実施した体験型授業を中心に年間指導計画に位置付けたいと考える。

7）その他（※特にあれば記述）

・　本校の児童生徒は、災害弱者である。日常のほんの少しのイレギュラーで情緒不安定になることもある児童生徒にとって、災害という巨大なイレギュラーによる不安の大きさは計り知れない。さらに、ここ何十年もこの地域には、大きな災害が起きていない。目の前に起きていない災害を想像し、児童生徒の生き抜く力を育てる、それが我々の使命だと考える。本プログラムの実践は、その小さな第一歩である。この学びを次につなげ、災害弱者である児童生徒がただ守られるだけの存在ではなく、学校や地域社会の安全活動に進んで参加・協力し、貢献しようとする気持ち、仲間や地域の力となる担い手として役割を果たそうとする気持ちを育んでいきたい。

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

学校名	23.愛媛県立今治特別支援学校
担当教員名	山田　ゆかり、青野　茉由

活動のテーマ	愛媛の番です。知ろう身の回り！守ろう自分の命！～災害に備えよう～
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　等）
活動に参加した児童生徒数	（中学部１年　小学部４・６年　高等部１～３　学年　122　人　）（複数可）
活動に携わった教員数	40　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	76　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2020 年　4　月　8　日　～　西暦　2021　年　2　月　10 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

・　児童生徒は、自分の身を守ること（自助）や周りの人と助け合う（共助）を学習し、災害に備えることの大切さを知る。また、防災についての知識を蓄え、共に助け合ったり、考え行動したりする態度を培う。

・　教職員は、防災教育について最新の情報を得ることで防災に対する意識を高め、本校で取り組む課題等に共通認識を持ち、より良い防災教育や研修につなげる。さらに、本校の防災教育の現状を知り、地域との連携を考える契機とする。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

・　減災教育プログラム後の防災学習及び教職員研修を含めた「防災教育及び防災研修実践のまとめ」（資料１）、「総合的な学習の時間年間計画」（資料２）と「総合的な学習の時間　防災学習スケジュール」（資料３）に示した。それぞれの避難訓練、防災学習、教職員研修をリンクさせ、PDCA サイクルで実施した。

3）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・　本校教職員全員に、９月研修会の講義よりＥＳＤやＳＤＧｓを含めた最近の防災教育と本校の防災教育や研修についてアンケートを実施し、現状と今後の取組について研修（資料４）を行った。その際、９月研修の講義より「東日本大震災による体験談」を宮城県階上小学校長に依頼し、オンラインで講義していただいた。

・　中学部１年の総合的な学習の時間で実施する（資料５）生徒はもとより、新たな実践として小学部中・高学年の児童も、助成金で購入した簡易トイレやパーソナルテント、段ボールベッド、間仕切り部屋を活用して避難所生活を体験することが可能になった。

・　校内滞在時の避難訓練を考えるだけでなく、高等部１～３年生の単独で通学生をしている生徒に、「自分の身を守るためには」の指導（資料６）を行った。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・　全校教職員の防災意識が高まり、防災教育は体系的に取り組むべきであるという気運が生まれ、カリキュラムの必要性の声が上がった。また、地域との連携を望む声も聞けた。

・　学校全体での避難訓練だけでなく、教科等で学習する内容を考えるようになった。高等部１年の産業科は、防災について社会科の授業を実施する。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・ ライフラインの途絶状況を想像し、各自非常持出袋を点検することで生徒が具体的な危険箇所を指摘したり、家庭でも持ち物について希望したりするようになり、判断力や発信力が付いた。
・ 間仕切り部屋、段ボールベット、簡易トイレ、パーソナルテントの組み立てを友達や教師と一緒に体験設営することで、なお一層、協力する態度が培われた。（資料７）
・ 避難グッズの作成等において各自ができることに取り組み、力を合わせて共に助け合うことの大切さを知ったり、また、避難生活に足りない物を考えたりした。災害が発生した際、小学部の児童は想像を働かせて「（段ボールベッドで）眠れそう。」と振り返り時に発表したり、中学部の生徒は設営の手伝いができる自信が感じられたりした。（資料７）

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・ 教職員は災害発生時の役割や動きを明確に周知したことにより、実動化演習及び各グループで児童生徒の実態や状況に応じた対応が考えられている。ヘルプカードの作成中の訪問教育をも含め、学校全体でより良い防災体制が構築されつつある。
・ 各部で防災学習のカリキュラムが作成された。（資料８－①，②）また、作成及び使用した教材のデータ保存を呼び掛け、共通教材として活用されやすいような表を作成中である。（資料８－③）
・ 防災用品の充実や事務課とも連携し、環境整備や震災対応マニュアルの見直しが随時図られている。
・ 市の防災教育推進連絡協議会にて本校の防災教育・防災活動の取組を報告した。行政、各自治体や学校の連携を要望し、年１回程度、保育幼稚園学校教職員及び県立高校職員を交えた意見交換会を検討してみてはどうかとの回答をいただいた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・ アクサの研修を全校研修に生かそうと考え、その際、得られた体験談も研修に加え、全校教職員の防災意識の高揚を図った。
・ 教職員研修には研修ごとに反省アンケートを実施し、報告すると共に改善に取り組み、次の研修に生かし常に日頃から考えられ進化する防災研修に努めている。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・ 避難訓練とリンクする防災学習のカリキュラムの実践。
・ 地域（桜井地区）との防災活動と地域発信。＜登下校時の避難、一時避難場所＞
・ 継続する教職員防災研修と新規の保護者への研修。

７）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

令和２年度□防災教育及び防災研修実践のまとめ□□□□□□□□□□□□□□□□□□□資料１□□

愛媛県立今治特別支援学校

中学部 防災学習 中１	避難訓練 学校	避難訓練 寄宿舎	地域との訓練	教職員研修	保護者	学校安全委員会	減災教育プログラム後の防災学習	防災用品の購入
１学期 総合的な学習の時間 ・身の周りの危険について考えよう□ ・非常持ち出し袋の中身を見直そ	６月９日 防災学習（1） 火災・消火訓練	４月上旬□寄宿舎防災教育（1） 避難方法確認 避難ペア，経路確認 ６月３日□寄宿舎防災教育（2） 火災避難訓練 ※避難場所：正面玄関		６月22日 教職員研修（1） 避難、通報、捜索、救護	４月 児童生徒持ち出し袋の整備・引渡しカードの整備 新入生引渡しカード作成	５月 学校保健委員会		７月 防災テント 特定小電力 トランシーバ ８月 避難用トイレ
２学期 総合的な学習の時間 ・避難生活を考えよう 新聞スリッパ 広告食器 牛乳パックスプーン ペットボトルエコライト ツナ缶ランプ等の制作 ・新居浜防災センターへ校外学習 □□□□□□□	９月３日 防災学習（2） 地震火災訓練 10月20日 防災学習（3） 起震車体験	７月６日□寄宿舎防災教育（3） 地震火災避難訓練 ※避難場所：運動場 ９月16日□寄宿舎防災教育（4）不審者対策訓練 10月13日□寄宿舎防災教育（5） 火災避難訓練 ※避難場所：運動場 12月１日□寄宿舎防災教育（6） 夜間集合訓練	９月３日 シェイクアウト訓練（今治市） 10月２６日 今治市防災教育推進連絡協議会	９月３日 消火栓使用訓練 ８月26日 教職員研修（3） 引渡し訓練・アンケート ６月～８月 各部・寄宿舎等 トランシーバ使用訓練 11月30日 教職員研修（4） 講演・今後の取組・アンケート	12月18日 保護者引渡し訓練	９月 学校保健委員会	９月□学校掲示板 「防災用品の掲示」 防火扉ステッカー表示 １１月４日□高１～３ 「単語学生指導」 １１月18日□中１ 「避難所の生活体験等」 １２月中旬□小４ 「避難所の生活体験等」	９月 プライバシーテント 10月 災害避難所用間仕切り 組立式段ボールベッド
３学期 総合的な学習の時間 ・防災頭巾を作ろう □□□□	１月８日 防災学習（4） 予告なし 地震避難訓練	１月27日□寄宿舎防災教育（7） 地震避難訓練 ３月上旬□寄宿舎防災教育（8） 火災避難訓練□※高３年卒業後 新ペア確認	１月８日 シェイクアウト訓練（愛媛県）	１２月１９日 教職員研修（5） 保護者引渡訓練 ２月上旬 カリキュラム検討	３月 児童生徒持ち出し袋の持ち帰り・点検		１月下旬□高１ 「社会科」地域の防災 ２月下旬□小３ 「避難所の生活体験等」簡易トイレ・ベッド	３月中旬 学校給食 防災食

令和２年度□□[□総合的な学習の時間□]□□年□間□指□計□画□□□□□□□□資料２

中学部□１年□□20名

生□徒□名	①～⑳
授□業□者	青野栄由□他８名

年□間□目□標		単元および学習内容		ねらい	実施状況
★□災害に関する調べ学習や体験的な活動を通して、自分の身を守ることや（自助）、周りの人と助け合う（共助）を学習し、災害に備えることの大切さを知る。 ○□自分たちの手で防災用品を作ることで、防災の意識を高める。 □ ○□本やインターネットなどを活用した調べ学習の方法を知ったり、まとめ方や発表の仕方を工夫したりする。 ○□愛媛には優れた特産品があることを知り、生産に取り組む方々の仕事を通して、働くことへの関心を高める。	１学期	テーマを知ろう 身の周りの危険について考えよう 過去の災害を知ろう 非常持ち出し袋の中身を見直そう	・今年度のテーマと大まかな予定を知る。 ・校内の防災設備と設置場所を知る。 ・災害時に自分の身を守るために必要なことを考える。 ・動画や写真で実際の災害の様子を視聴する。 ・防災グッズの体験	・今年度のテーマについて知り、計画や予定を立てて学習に対する見通しを持つ。 ・防災設備の役割を知る。 ・安全に、自分を守って避難する方法を考える。 ・災害時に役に立つ防災グッズの体験をしたり、必要なものについて調べたりして、非常持ち出し袋の中身について調べる。 ・ライフラインが止まる可能性があることを理解する。 ・ライフラインが停止したとき、何が必要か考える。 ・防災グッズの必要性を知る。	□校内の防災設備の名称や役割を覚えた。いろいろな災害の動画を見ることで怖さを知り、大災害が起こると、電気、ガス、水道が使用できなくなる可能性があることを理解し、非常用持ち出し袋に入れておくべき物をイラストを参考にしながら考えた。 実施授業時数□（20）
	２学期	避難生活を考えよう オンライン文化祭に向けてまとめよう	・新聞紙スリッパ作り ・広告食器作り ・牛乳パックスプーン作り ・ペットボトルエコライト作り ・ツナ缶ランプ作り ・段ボールベッドの組み立て ・簡易仕切り部屋の組み立て ・学習したことをまとめる	・なぜ必要なのかを理解しながら、丁寧に制作する。 ・身近にあるもので、代用できることを知る。 ・道具を適切に扱い、安全に留意して製作に取り組む。 ・友達と協力して組み立てる。 ・避難所の生活を疑似体験し、段ボールベッドや仕切り部屋の必要性を理解する。 ・体験したこと、感じたことを文章やイラストで表現したり、写真を選んだりして振り返る。	なぜ必要なのかを理解して、防災グッズ製作に取り組んだ。広告で作ったコップで実際にお茶を飲むことで、身近にある物で代用きることを知った。 避難所体験では、友達と協力して組み立て、仕切りや段ボールベッドがあることで、快適に過ごせることを知った。 実施授業時数□（28）
	３学期	防災頭巾を作ろう 愛媛を知ろう 校外学習に行こう	・防災頭巾を作る。 ・愛媛の特産品について調べる ・事前指導 ・校外学習 ・事後指導	・防災頭巾を制作する。 ・みかんやタオル、砥部焼等の優れた特産品があることを知る。 ・自分の感じたこと、知っていることを発表する。 ・砥部焼の製作に携わる方々の仕事を知る。 ・日程、行先、活動内容について知り、楽しみにする気持ちを高める。	実施授業時数□（-□）

資料３

令和２年度総合的な学習の時間　防災学習スケジュール

愛媛県立今治特別支援学校

【テーマ】

愛媛の番です。知ろう身の回り！守ろう自分の命！　～災害に備えよう～

６月　８日　　今年度のテーマ発表、１年間の流れ

６月 15 日　　校内の防災設備、避難経路について調べる

６月 22 日　　防災設備のそれぞれの役割について

６月 29 日　　動画等で災害の怖さを知り、ライフラインが止まる可能性があることを理解する

７月　６日　　ライフラインが止まったら、何ができなくなるか、何が必要か

７月 13 日　　非常用持ち出し袋について

７月 20 日　　非常用持ち出し袋にについて（自分にとって必要な物は何か）

２学期～　　防災グッズ体験、防災グッズ作り（新聞紙スリッパ、ペットボトルランタン、ペットボトル皿、牛乳パックスプーン、ツナ缶ランプ等）

避難所体験（簡易仕切り部屋、簡易ベッドの組み立て）

校外学習（新居浜防災センター）

３学期～　　防災頭巾制作

【来年度】　・防災食の体験

・応急手当

・教室・学校内・地域の危険な場所を探そう

・防災かるたを作ろう

1 本日の内容

1　最近の防災教育について
　第７回アクサ・ユネスコ協会減災教育プログラム
オンライン研修会より

2　本校の今後の取組
　アンケート結果より
　小学部から高等部までのカリキュラム作り

総務課　学校安全主任
山田　ゆかり

2 なぜ、防災教育が必要なのか？

今後、３０年間に　南海トラフ大地震が
　７０％～８０％の確率で起こる。

ーその時、あなたは　あなたを
子どもたちを　家族を　地域を守れるか？ー

学校現場では、
災害を乗り越え、生き抜く力を育むことが必要である→防災・減災教育

3 見えない・見える防災教育

「全知P連　BOSAIサイドブック」より

- **普段の授業の中にある「目に見えない防災教育」**
  - 健康な生活・体力　歩行・移動　身支度
  - 集団行動　コミュニケーション
  - 感情認知や感情コントロール
  - 自尊感情・自己有能感

災害を乗り越えるしなやかな力（レジリエンス）

- **「防災をテーマにした防災教育」**

4 防災をテーマとした防災教育

- 災害に対する知識・理解
- 災害に対する意識・想像
- 災害に備える力
- 災害時の判断力・適応力
- 復旧への参画

知識・技能
思考・判断・表現力
学びに向かう力・人間性

自分を守る知識や技能，判断力と行動力（自助）
家族や友達，地域と連携・協働する力（共助）

5 最近の防災教育

- 防災教育は、ESDと学習指導要領を基本理念としている。

ESDとは？
Education　for　Sustainable Development
持続可能な開発のための教育

人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等、人類の開発活動に起因する現代社会における様々な問題を，各人が自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、それらの問題解決につながる新たな価値観や行動変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動である。

ESD国内実施計画より

6 新学習指導要領前文とESD

- これからの学校には（中略）一人一人の児童が、自分の良さや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。このため、必要な教育の在り方を具体化するのが、（中略）教育課程である。

7 持続可能な開発目標:SDGs
Sustainable Development Goals

8 本校の防災学習
アンケート結果より　1

1　全教職員(回答者)が防災学習を実施している。
　学級、ホームルームにおいて　100%
　　避難訓練前後に77%が実施。
　　年間を通して計画的に20%(中学部)
　　不定期、生単時

2　実施内容について（予定含む）
・災害について
　地震　火事　津波　台風
・災害時の場所における対応
　学校内、家庭、登下校、休日
・防災グッズの製作
　マスク、食器、防災頭巾、スリッパ、照明

9

本校の防災学習
アンケート結果より　2

- 実施内容について（予定含む）

その他

将来働く作業所での対応

必要な薬、病院の対応など

持出用荷物の確認

10

本校の防災教育

・ 教材等

「避難訓練時のスケジュール」

「災害から命を守るために」

「くまモンの地震の備え」

→ＬＡＮの教材が活用されている。

□「マイタイムライン」活用は、0名

〇今後、教材の充実を目指す。

・消防庁　「チャレンジ防災48」

・日本赤十字社

「まもるいのち　ひろめるぼうさい」　等

11

防災学習に必要な内容　1
～アンケート結果多い順～

- ダンゴムシの体勢
- 災害の種類
- 「おはしも」を知る
- 避難経路を知る
- 非常持出袋の点検
- 引渡し訓練
- 避難所を知る
- 防災設備を知る

避難訓練の前後

12

防災学習に必要な内容　2
～アンケート結果多い順～

- 地域のハザードマップの確認
- 避難所生活を体験する。
- 防災食を作る。
- 防災マップ、防災グッズ（スリッパ、頭巾）を作る。
- 応急手当を学ぶ。
- 災害の仕組みを知る。
- 災害伝言ダイヤル
- 地域とのつながり、防災センターの見学

13

防災学習に必要な内容　3
～アンケート結果多い順～

- 災害の歴史
- ボランティアについて

- その他

〇かかりつけ病院（主治医）との連携

14

R2年度中学部１年総合的な学習時間

1学期		2学期		3学期	
6月	災害の種類を知る	9月	非常持出袋を点検	1月	応急手当の仕方
	災害の仕組みを知る	10月～11月	防災グッズ作り（マスク食器、照明、スリッパ）		防災すきん作り
	おはしもを知る		防災センターの見学		
	避難経路を知る	11月	間仕切り、段ボールベット設営 避難所生活を体験		
	ダンゴムシの体勢	12月	防災食作り		
	防災設備を知る				
	消火器の使い方				

2年生、3年生で防災マップ作りを予定として考案している。

15

間仕切り部屋・段ボールベット設営
避難所生活の体験　R2.11.18

16

高等部１年１組
社会科で学習予定

- 12月 災害の種類を知る
  災害の歴史を知る

- 1月　防災マップを作る
  地域のハザードマップの確認
  地域とのつながり

17 訪問教育では

- ヘルプカードの作成
  （緊急時連絡先等を記入）
  来校中にバギーに付ける
- 引渡しカードの作成

18 単独通学生指導では

- 通学時における危険回避の行動
- 居住地のハザードマップの読み取り
- 一時避難場所や避難所の把握→二カ所
- １７１災害伝言用カードの作成と活用

  →来年度は、単独通学生証と合体

○　以上のことを年度初めに指導予定

19 各部　防災学習に必要な内容

内　　容	小学部			中学部	高等部
	低	中	高		
災害の種類を知る				○	
災害の仕組みを知る					○
避難経路の確認・事故					
おさえるを知る	○	○	○	○	○
避難経路を知る	○	○	○	○	○
ダンゴムシの体験	○	○	○	○	○
地震と地盤	○	○	○	○	○
防災器具を知る		○	○	○	○
消火器の使い方			○	○	○
防災用品を点検する		○	○	○	○
防災マップを作る				○	○
防災グッズを作る（スリッパ、ずきん等）			○	○	
防災食を作る			○	○	○
応急手当を学ぶ				○	○
防災センターの見学				○	
避難所を訪問を体験する（トイレ、ベット等）			○	○	○
地域のハザードマップの確認				○	
防災情報（避難情報）の見方（模擬レベル）					
避難所を知る					○
ヘルプカードを作る					
災害の歴史を知る					○
ボランティアについて					○
地域とのつながり					○
災害発生ライヤルについて					○

20 防災学習、研修への気付き

- 学校全体で取り組むことが必要である
- 学年、科によっては、社会科で取り扱える
- 生活単元学習の中で年間を通して計画的に
- 小・中・高等部で系統立てた学習につながればよい。

  ー中１の総学だけではなくー
- 体験型の学習、研修が有効
- 教職員の防災に対する意識の大切さ
- コロナ渦における防災対策の周知
- 保護者への研修

21 本校の今後の取組

- 小・中・高等部での系統だった学習が大切→カリキュラム作り
  - みんなが主体的に考える

  防災士取得の教職員、社会科、理科等各教科、生単を行う授業者etc…

  →「研修の日」を活用

○　教材の共有化

ＬＡＮに集約して利用

22 防災学習実施には

○　災害が発生したときや記念日（防災の日）

朝の連絡（特活課）
朝の会・終わりの会
ショートホームルーム
} 防災担当から情報提供

○　防災避難訓練
起震者体験

実際の避難訓練等の場面とリンクしながら防災学習を考えていく。

23 つながりが　大切

○　各部間そして未来へ
能力や態度を実生活・実社会における実践へと

○　家庭・地域　→　N助へ
保護者への研修
地域の防災組織の中へ

NPOやネットワークの支援

○　人とのつながり
児童生徒同士や地域と　参加体験型

24 アクション！ 防災　Ｉｍａｔｏｋｕ！！

ＬＡＮ<sensei<Ｒ２ＶＩＤＥＯ<<Ｒ２．１１．３０防災研修

防災学習指導案（総合的な学習時間）資料５

１　目　的　・　テントやベッドを組み立てる。　［知識・技能］

・　体験を通して避難所での生活をイメージし、防災意識を深める。［思考・判断・表現］

・　一人一人の役割を果たし、みんなで協力することの大切さを学ぶ。［主体的な態度］

２　日　時　　令和２年 11 月 18 日（水）13：30～15：00

３　内　容

学　習　活　動	手　立　て	留意点及び〈準備物〉
１　大きな災害が起こったとき、学校が避難所になることを確認する。	・避難所の写真を見て、イメージを持つ。	〈避難所や避難所で使用されているグッズの写真〉 ・たくさんの人が集まり、長期間一緒に生活することを伝える。
２　組み立てる。 ・簡易仕切り部屋 ・簡易段ボールベッド ・簡易トイレ ・パーソナルテント	・一斉の指示に従い、安全に協力して組み立てるよう促す。 ・より快適な空間にするためのヒントを出す。	〈手順書〉 ・手順書を確認しながら丁寧に組み立てる。 ・隣の部屋を意識し、ベッドの位置や入口の場所を工夫する。
３　体験する。	・仕切りがあると、どのような効果があるのか気付くようヒントを出す。 ・床とベッドとの寝心地を比較するよう促す。	・仕切りがあることでプライベートが守られ、安心した避難所生活が送れることを確認する。 ・段ボールベッドがあることで、長期間の生活が快適になったり、特に足腰の悪い人や高齢者にとって楽になったりすることを伝える。
４　本時の学習を振り返る。	・生徒だけで組み立てができることを知る。 ・気付いたことや感じたことを発表する。	・災害時において一人一人が大きな役割を果たしていることに気付くよう問い掛ける。

資料６

単独通学生指導
「登下校における地震時の知識と行動について」

１　目　的　・　通学路で地震等が発生した場合の行動の仕方を知る。　［知識・技能］
・　「１７１記入カード」や避難行動について考える。［思考・判断・表現］
・　ハザードマップ等を主体的に調べて「１７１記入カード」を作成する態度を培かう。［主体的な態度］

２　日　時　　令和２年11月４日（水）15：40～15：55

３　内　容

学　習　活　動	手　立　て	留意点及び＜準備物＞
１　震度６弱の地震のパワーポイントを視聴する。	・震度６弱の起震車体験を思い出すように登下校時の通学路での危険を話す。（塀が倒れる、窓ガラスが割れる等）	＜スクリーン、パソコン、プロジェクター＞ ・パワーポイント 「地震から身を守るために」
・場所により、取るべき行動が違うことを知る。	・学校～バス停・駅は桜井中学校、少しでも高い所に避難することや電車・バス乗車中は乗務員の指示に従うことに気付くように話す。 ・最寄り駅・バス停～自宅への避難行動を考えられるように誘導する。	・今治市には最短で161分後に＋１m津波が到達。最大で3.3m、８時間以上津波は継続することも伝える。
２　今治市、西条市等のハザードマップを見る。	・利用する駅やバス停からの通学路はどのような状況になるかを問い掛ける。	＜「津波防災マップ」 今治市、西条市、四国中央市＞
３　避難場所や避難所一覧を見る。	・各自、避難場所や避難所になる所をチェックしておく必要性に気付くように話す。身を寄せる場所として、２か所以上を挙げる。	・「指定避難所一覧」第４教棟１階入り口掲示板に貼るので、自分でチェックするように伝える。
４「自分の安否を知らせる」災害伝言ダイヤル１７１を知り、必要なことを考える。	・「１７１記入カード」を配布する。 ・避難所についても、記入して携帯することを促す。	・体験利用日１日・15日・正月三が日、防災週間等があることを話す。

資料 7

ランタン	手作りコップ	新聞スリッパ	ツナ缶ライト
掲示	間仕切り部屋設営	段ボールベッドの組立	

□□□□□□□□□□□□□防災学習に必要な内容□＜令和２年度教職員アンケート結果より＞□□□□□□□□R３．３.16□資料８－①□

内容		小□低学年	小□中学年	小□高学年	中学部	高等部
A 災害の種類	①-災害の種類を知る				○	
	②-災害の仕組みを知る					○
B 避難内容・方法【校内】	③-避難訓練について	○	○	○	○	○
	④-おはしもを知る	○	○	○	○	○
	⑤-避難経路を知る	○	○	○	○	○
	⑥-ダンゴムシの体勢	○	○	○	○	○
	⑦-引渡し訓練	○	○	○	○	○
C 防災グッズ	⑧-防災設備を知る		○	○	○	○
	⑨-消火器の使い方			○	○	○
	⑩-非常持出袋を点検する		○	○	○	○
	⑪-防災マップを作る				○	○
	⑫-防災グッズを作る（スリッパ、ずきん等）			○	○	
	⑬-防災食を作る			○	○	○
D 避難内容・方法【地域】	⑭-応急手当を学ぶ				○	○
	⑮-防災センターの見学				○	
	⑯-避難所生活を体験する（トイレ、ベット等）			○	○	○
	⑰-地域のハザードマップの確認				○	
	⑱-防災情報（避難情報）の見方（警戒レベル）					
	⑲-避難所を知る					○
	⑳-ヘルプカードを作る					
	㉑-災害の歴史を知る					○
	㉒-ボランティアについて					○
	㉓-地域とのつながり					○
	㉔-災害用伝言ダイヤルについて					○

防災学習カリキュラム　　愛媛県立今治特別支援学校　　資料8―②

行事	小学部低学年	小学部中学年	小学部高学年	中学部1年	中学部2年
一学期 4月 火災・消火訓練（基本行動）	・避難訓練について（生単）③ ・災害の種類（生単）① ・避難経路、学校探検（生単）② ・おはしも（生単）④	・災害の種類（生単）① ・おはしも（生単）④ ・避難訓練について（目生）② ・避難経路について（静活）③ ・消火訓練を見る（静活） ・地震や火災に対する基本的な対応（生単）	・おはしも（生単）④ ・避難経路について（生単）③ ・学校探検（生単）② ・消火器の使い方（生単）②	・災害の種類（生単）① ・ライフライン ・防災設備（生単）② ・避難所生活の体験（生単）⑩	・おはしも（生単）④ ・防災食（生単）⑩ ・避難所生活の体験（生単）⑩ ・ヘルプカード見直し（生単）⑩ ・非常持出袋の点検（生単）⑩
二学期 9月上旬 地震火災訓練 10月 起震車体験 12月 引き渡し訓練	・ダンゴムシの姿勢（生単）③ ・おはしも（生単）④ ・災害の種類（生単）① ・起震車の体験（生単） ・引き渡し訓練の体験（目生）⑦	・避難訓練について（目生・生単）② ・ダンゴムシの姿勢（目生・生単）③ ・おはしも（目生）④ ・避難経路について（目生）③ ・起震車の体験（生単） ・地震について（静活）② ・引き渡し訓練の体験（目生）⑦ ・非常時の待機場所について（生単） ・避難所生活の体験（生単）⑩	・危険な場所を知る（生単） ・非常持出袋の点検（生単）⑩ ・防災食の調理（生単）⑩ ・防災グッズについて（生単）⑩	・防災頭巾の制作（生単）⑩ ・ヘルプカードの作成（生単）⑩	・地域のハザードマップの確認（生単）⑩
三学期 1月 予告なし地震火災訓練 3月 給食：防災食開食	・避難経路について（静活）③ ・おはしも（目生）④ ・ダンゴムシの姿勢（目生・生単）③ ・防災食を食べる（目生）⑩	・避難訓練について（静活・目生・生単）② ・防災センターの見学（生単・静活）⑩ ・非常持出袋の点検（生単）⑩ ・防災食の調理（目生・生単）⑩	・避難経路について（生単）③ ・避難所生活の体験（生単）⑩	・非常持出袋の点検（生単）⑩ ・防災グッズの制作（生単）⑩ ・防災センターの見学（生単・静活）⑩	・応急手当（生単）⑩ ・非常持出袋の点検（生単）⑩

	中学部3年	高等部1年	高等部2年Cコース	高等部3年	高等部産業科（2年）
一学期	・避難訓練（生単）③ ・おはしもの復習（生単）④ ・避難経路（生単）③ ・消火器の使い方② ・非常持出袋の点検（生単）⑩ ・防災情報の見方（警戒レベル）（生単）⑩ ・避難所（生単）⑩	・避難訓練について（生単・HR）③ ・避難経路を知る（生単・HR）③ ・ダンゴムシの体勢（生単・HR）③	・ダンゴムシの姿勢③ ・ヘルプカード作成⑩ ・非常時持出袋の点検⑩（学期末）	・避難訓練について③ ・避難経路を知る③ ・引き渡し訓練⑦ ・非常持ち出し袋の点検(生単・HR)⑩ ・応急手当の学習(保健)⑭	・災害用伝言ダイヤルについて③ ・災害時の備えについて③③ ・避難経路を知る③ ・火災と地震の避難行動を知る（HR）④ ・非常持出袋の確認（夏休み持ち帰る）⑩ ・応急手当を学ぶ⑭
二学期	・避難訓練（生単）③ ・おはしもの復習（生単）④ ・避難経路（生単）③	・防災設備を知る（生単・社会）③ ・消火器の使い方（学校行事）② ・非常持出袋の点検（生単・HR）⑩ ・引き渡し訓練（生単・HR）⑦	・災害時の仕組み② ・非常時持出袋の点検⑩（学期末）	・避難訓練について③ ・防災食の調理(家庭)⑬	・防災マップを作る① ・地域のハザードマップの確認⑩ ・災害の歴史を知る①
三学期	・避難訓練（生単）③ ・避難経路（生単）③ ・非常持出袋の点検（生単）⑩	・避難所を知る（生単・社会）⑩ ・防災マップを作る（生単・社会）⑩ ・災害の種類を知る（保健体育・社会）① ・災害の歴史を知る（社会）①	・防災食の調理⑬ ・避難所生活の体験⑩	・避難訓練について③ ・ボランティアについて⑩ ・地域とのつながり⑩	・身の回りの危険について ・避難所生活の体験⑩ ・防災情報の見方～インターネット、ＩＣＴ活用により～⑩ ・防災食の調理（家庭科調理）⑬

防災教材一覧□（保存先：LANDISK＞01総務課＞☆防災資料□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□R3.3.16-□資料８－③

学部	A（災害の種類）	B（避難内容・方法【校内】）	C（防災グッズ・備蓄品）	D（避難内容・方法【地域】）
小学部	・災害についての動画・絵本 ・「災害から命を守るために」スライド、ワークシート ・「くまモンの地震の備え」の動画	・避難訓練時のスケジュール ・避難訓練の様子（写真・動画） ・ダンゴムシの体勢のスライド ・おはしものスライド ・たんごむしになろうの掲示 ・個別のスケジュール ・「災害から命を守るために」スライド ・シェイクアウト訓練時の動画、写真 ・日本赤十字社□防災間違い探し をけんはっけん！（地震、避難PDF） ・校内地図	・防災食（防災給食） ・非常持ち出し袋	・新居浜市防災センター見学・体験（校外学習） ・備蓄品（簡易トイレ、段ボールベッド、ランタン、プライバシーテント等）
中学部	・災害の種類（スライド） ・災害の種類（プリント）	・避難訓練時のスケジュール ・おはしものスライド	・防災頭巾製作の手順書 ・非常用持出袋（生徒用） ・防災グッズ製作の手順書 ・水消火器、的 ・非常持ち出し袋チェックリスト	・防災センター見学事前学習（スライド） ・地域のハザードマップ ・校内設備（スライド） ・防災設備の役割 ・簡易ベッド ・簡易仕切部屋 ・簡易テント
高等部	・動画（県のHP等） ・災害に関するパワーポイント ・災害に関する映像	・おはしものスライド ・ダンゴムシの掲示物 ・防災ボードゲーム	・防災設備のスライド・市役所等のパンフレット クックパッド ・防災食（ごはん、パン、カレー等） ・ヘルプカード ・非常時持出袋（食品、シート、落ち着く物等）	・南海トラフのDVD ・簡易トイレ ・簡易ベッド ・プライバシーテント
産業科			・非常持出袋、自分の薬、自分にとって必要な物 ・救急箱 ・防災グッズ、簡易トイレ、簡易ベッド ・防災食	・携帯電話 ・障がい者の防災ハンドブック（障がい者災害対応のてびき） ・地域のハザードマップ（避難所含む） ・防災マップ、ハザードマップ

学校名	24. 沖縄県立　八重山特別支援学校
担当教員名	東江　裕二郎

活動のテーマ	学校防災システムを活用した総合避難訓練
主な教科領域等	教科領域（　　生活科　　）　　）
活動に参加した児童生徒数	（　全学年　　６３　人）（複数可）
活動に携わった教員数	72　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	＿＿＿＿＿＿人　【保護者・地域住民・その他（　　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　2020　年　4　月　　日　　～　　西暦　2020　年　10　月　22　日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本校における課題点をまとめ、全職員、幼児児童生徒が主体となって防災学習に取り組み、災害時に主体的に適切な行動がとれるようにする。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

日時	内　　容
4月	石垣市宮良小学校合同避難訓練打ち合わせ①防災マニュアル見直し
5月	石垣市防災危機管理室　打ち合わせ
6月	石垣市宮良小学校合同避難訓練打ち合わせ②
7月	「防災便り発行①・ショート訓練①・株式会社センチュリー打ち合わせ・防災意識調査（職員）、学校防災対応システム導入校モデル校研修会
8月	ショート訓練②
9月	ショート訓練③・石垣市宮良小学校合同避難訓練打ち合わせ
10月	「宮良小学校合同地震火災津波避難訓練」
11月	沖縄県健康教育大会発表原稿提出・防災便り②号
12月	学校防災対応システム導入校研修会
2月	沖縄県健康教育大会実践報告会
3月	学校防災安全マニュアル見直し作業及び提出

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
　昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

助成金で購入した「お散歩カー」を活用し、幼児児童生徒をある程度まとまって避難することができた。また、非常食や防災備品を購入し、全体に周知し、活用方法などを共有することで、職員の防災に対する意識が高まった。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

総合避難訓練では大雨により実施ができなかったが、防災マニュアルの見直し作業をし、より実践的な避難体制を構築することができた。また、地域の小学校と防災をテーマに交流できたことで、地域の方へ特別支援学校の生徒への理解を促すきっかけになった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。
幼児児童生徒が学びの中心になるような授業設定をすることで、いろいろなアイディアが生まれ興味関心を持って学習に取り組むことができた。また、繰り返しの学習が定着し、教師の少ない指示で自ら状況を判断し、避難行動をとることができるようになった生徒がいた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から
職員への学校の防災体制についてのアンケートでは、避難場所や学校に設置されている防災機器の周知がされておらず、初めて存在を知る職員もいたが、アンケート調査後に周知することができた。また、保護者への本校の防災体制理解を促す「防災便り」を発行し、理解と協力を得ることができた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点
〇地域との連携した合同避難訓練（石垣市防災危機管理室、株式会社センチュリー、石垣市立宮良小学校）
〇幼児児童生徒が中心となった防災学習「ショート訓練のPR動画」「地域の防災マップ」「校内の防災マップ」「もくもくトンネル（火災発生時に適切な避難行動の模擬体験）」「防災スタンプラリー」「非常食体験（栄養士と連携）」

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望
〇新型コロナ感染拡大防止による避難経路、避難方法の検討が急務
〇地域住民との継続した合同避難訓練。

７）その他（※特にあれば記述）
※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。